
瑠璃鬼

高杯 梓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

瑠璃鬼

【Nコード】

N4233E

【作者名】

高杯 梓

【あらすじ】

『全て捨てても、成し遂げなければならないことがあるんだ。』
『凶悪犯罪者、テロリストが紛れ込む国、日本。そこに、彼女はいた。人々を恐怖のどん底に落とす彼らを狩るために、彼女は血塗れた道を進む。信頼できる、仲間と共に・・・』

プロローグ

例えこの身が滅びても、私は貴方を信じよう…
それは昔、ある二人の間で交わされた『約束』。
過ぎし日はイロあせず、胸に残って…

鮮やかなアカが、暗い道に散った。

ゆつくりと弧を描く、真紅に濡れた唇。

ただ死のみが充滿する空間に、涼やかな声が響いた。

「殺したのか…見事だな…」

月に照らされ、血に染まった道の先に、綺麗な少女が立っていた。

「またあったみたいだね、バラバラ殺人」

「現場は血の海だったみたいだよ」

「でも、良かったじゃない？ 犯人その場にいたんでしょ？」

「なんか呆然としてたみたいだぜ？」

学園内で花咲く一つのウワサ。それは、一月ほど前から始まった大量殺人事件である。

…昨日未明、その犯人が捕まった。

そんな、自分たちとは縁遠い事件のウワサを笑いながら話すクラスメートたちを一瞥し、窓際の少女は一人、物憂げに曇天を見上げた。

それは、何時もと変わらぬ日常、危うい均衡。

薄氷の上のエデン、それに気づかない、平和に酔った人々。

少女はその無表情の整った顔に、薄く冷たい笑みを浮かべた。

あの血は、綺麗だった…

彼女の、自分たちとは違う雰囲気気づく者は、そこに存在し得なかつた。

その少女は、全身が血に濡れて立っていた。

…狂ったように、笑いながら…

第一話

血に濡れた道を、貴方が進むというのなら、私もその道を共に行く……

二度と光の道に戻れないとしても。

それは、誓い

ガタンツという大きな音と、かすかな息遣いがそこに響いた。

暗い暗い、倉庫の中。

その奥にむかい、その人は声をかけた。

中で、唯一生き残っているはずの人に。

「ルキ!!! ……生きてるか?」

「死んでるとでも思ったのか?」

暗闇から返って来たのは、少し呆れているような、少女の声だった。

トンツトンツという軽快なリズムと共に、声も出口に近づいてくる。

「君ってヤツは……私を君の能無しデクの棒部下と一緒にくたにしないで欲しいものだな」

「脳な……お前な、その毒舌どうにかしろよ……」

「無理だ。無茶を言うなフビュリントス迷宮」

月光の下に現れたのは、やはり少女だった。

服は白と黒を合わせ、和洋を混ぜ合わせた、だが不思議と彼女の雰囲気は合っている見た事のないもの。

その服や顔に飛び散ったものを見、少し眉を寄せ、『迷宮』と呼ばれたその人は、すっと彼女の顔に手を伸ばし、それを拭う。彼女は迷惑そうに眉を寄せ、迷宮を見た。

「……おい……」

「返り血。ついてたんだよ…服、ちゃんと洗えよ？」

「……ハア……」

彼女はため息を吐いて髪をかき上げ、迷宮を見る。

「中に六体だ。がんばれ」

「…ちよい待て」

引きつった顔をちらりと見、ニヤツと笑った彼女は歩き去る際、

迷宮の肩を叩いた。

「ま、がんばれ。成人男性」

「おい ……！！」

夜中の二時、本来なら人は寝静まるその時に、青年の嘆きの声が響いた。

早朝、五時。

部屋に訪れた客を見て少女は、器用に片眉だけを吊り上げた。

額に汗の粒を浮かべ、体をおってあがった息を整えようとしている青年に、少女は無言でタオルを投げた。

「すまん……」

それだけ口にし、汗を拭う青年に、少女は呆れたように言った。

「何だつてそんなにフルマラソン全力疾走した後みたいになってるんだ、迷宮」

「てめえのせいだろうが！！」

タオルを握り締め、明らかに年下の少女に怒鳴る青年 迷宮

は、『何言ってるんだこいつ』と言うように見てくる少女に訴える、
と言うより、大人気なくまた怒鳴る。

「加減を知れっ、加減をつ！ 首両手両足全部切り飛ばしてんじや
ねえ！ 回収するの大変だったんだぞ？！」

仕事を押し付けられた本人として、それは至極まっとうな意見だ
つた。…だが。

「知るか」

少女は迷宮の意見をさらりと流した。

少女に迷宮ラビュリントスと呼ばれた青年、本名を十葉風馬とじゅうちゅうふうまといい、二十歳になりたての青年である。『迷宮』というのは、仕事上使う識別名コードネームのことで、それを知るのは極々限られた者のみである。

そして、その『限られた者』のみ知っている名で風馬のことを呼んだ少女も、同じようなコードを持っている。

本名は咲城瑠姫さきぐじりゅぎといい、コードは瑠璃姫ラリスラスリ・プリンセスという。

二人は数少ない同僚で、よく任務を組まされるコンビである。

任務を終わらせることが早く、【名物コンビ】としてあつかわれていたりもする。

「いいじゃないか、別に。終わったんだし」

「俺はそういうこと言ってんじゃねえよ！」

瑠姫は風馬の声に思いつきり眉を寄せ、耳をふさぐ。

「迷宮、うるさい。近所迷惑だ」

それに風馬は押し黙り、だが直ぐに言う。

「防音設備してるだろ」

「…チツ」

瑠姫は風馬から顔を背け、忌々しげに舌打ちし、ソファに置いてある黒いファイルを取り、風馬に向かって投げた。それはもう、力一杯。

相当な速さで飛んでくるそれを、風馬は二本の指でやすやすと受け止め、パラッとページをめくる。

ごろんとソファに寝転がった瑠姫は、目を閉じ長く息を吐き、問う。

「解体した六人、本当に上層部ウエはわかってんだらうな？」

「さあな……よし、合格。もう寝ていいぞ」

ボタン、とファイルを閉じる音と共に、微かに頷く気配がした。
「おやすみ」

風馬の声に答える代わりか、瑠姫はヒラッと手を振り、眠りの世界へと旅立っていった。

「まったく…」

風馬は毎度寝つきのいい瑠姫に苦笑し、ファイルを机に置いて、そっと抱き上げた。そして起こさないようにゆっくりと、寝室に運び寝かせた。

風馬は瑠姫の顔をじっくり見、ため息をつきたくなった。

外面はいいのにな…

どうしてあんな性格になってしまったのか。

だが、あのひねくれた性格は自分や、仲間の前でしか出さないの
で、救いようはある…多分。

「黙っていさえすりゃ、古今東西、何処探してもここまで完璧な奴
はいないんだけどな…」

彼から思わずもれた本音は、同僚全員の本音でもあった。

瑠姫はまだ十五歳、花の女子高生である。……彼女を取り巻く環
境は【普通】とは遙かに遠いものではあるが…

何時ものように登校した瑠姫は、十五歳の女子高生あるまじき無
表情でため息をついた。

周りは【咲城 瑠姫】なんて存在しない、とでもいうように、彼
女を無視していた。それも何時ものことなのだが。

瑠姫がため息をついたのはそんな事ではなく、彼女が使う机であ
る。

でかでかと、赤のマジックで『死ぬ』と書いてあった。

…ガキだな…

瑠姫は胸中で毒をはき、かばんを片付ける。

高校生活初日から始まった、いわゆる『いじめ』は半年間ずっと

瑠姫に集中している。

『高校の勉強なんて面倒だ』と思っていた瑠姫はそれを理由にさつさと中退しようとしたが、上司やら同僚やらに『行け』と笑顔で脅され、仕方なく低レベルの授業に付き合っている。

さつさと放課後になればいいのに…

瑠姫はくるりとペンを回して、深々とため息をついた。

「ルキ？ おーい生きてるかあ？」

変に間延びした声に面倒そうに瑠姫は返した。

「死んでるように見えるか？」

「うんにゃ、まったく」

放課後。

使われていない教室の中央に寝転がっていた瑠姫は、声の主に乾いた笑い声を聞かせ、ゆっくりと起き上がった。

カツン、という靴音とともに、呆れと感嘆がないまぜになった声がした。

「ワオ、死屍累々。何時見てもすっごいねえ」

「学習能力ないんだろ」

『君も同い年だろう』と思ったが、冷ややかに『精神年齢のことだ、そんなこともわからないのかお前は』と、瑠姫お得意の毒舌で返されそうだったので、声の主は懸命にも何も言わずに、倒れている男の腹を軽くつついてみた。

呻くだけで、起きない。完璧にノびている。

何をどうすれば、こんなに強くなれるんだか…

瑠姫に悟られないようため息をついたその人に向かって、彼女は首を傾げた。

「それより、どうしたんだ、左京サキマ？ 何時もなら保健室にこもっているのに…」

「……いくら僕でも、ずっと保健室にいるわけ無いだろ…まあ保険

医だからいなきやいけないんだろっけど」

瑠姫は思わず目を瞬かせ、その人 左京に向かって声をかけた。

「……………左京」

「ん？」

首を十五度に傾けた左京に瑠姫は疑わしげに問うた。

「…君、一体何歳だ」

「……………」

無言で投げられたバインダーを受け止め、瑠姫は軽く肩をすくめたのだった。

『片目を隠しているのは何故か？』、そう、昔聞いた事があつた。眼帯で右目を隠してもなく、かといって見えない、というわけでもないのに、だ。

『片目だけ髪で隠して…その内目が悪くなるぞ？』と。

そういうと、彼女は思いつきため息をつき、呆れ声で、一応答えてくれた。

『これは、「仮面」だ。「あいつら」から逃げ切るための、な』

私たちはいつも、仮面をかぶって生きているんだ…自分自身という、な…

その言葉は深く、心の奥底へと沈んでいった。

彼らの名は、『テロリスト暗殺部隊』…血塗れた道を行く者たちである。

「どーでもいいけど、こいつらどーするのさ？」

「……………ほっとけ」

第二話

闇も光も、全て包むものだ…怖がるな、傍にいるから…
はたされなかった約束を、まだ胸に抱いている。
苦い記憶とともに。

「……で？」

「…開口一番がそれかよ、瑠姫」

別にたいして感動的な話でも、興味をそえられる話でもなかった
ので流したのだが、その何が悪かったのか。

隣に立つ相方を見て、彼女は軽く方眉を上げた。

「任務の話と聞いていたのに、いきなり妙な話をするほうが悪い」

「みよ…お前な、世間一般的に世間話は普通の会話だろ？」で？
『は
はないだろ、』で？』は

呆れたように資料を丸め、肩を叩きながらにこにここと何も言わな
い上司を見る。

「ちよつと、センパイで同僚で上司じかき。お前も何か言えよ…」

「おや？これでも私は訴えているのですが？」

風馬は顔を引きつらせて問う。

「ほお…それはどうやって？」

「無言で」

「無言つて、お前なあ…！」

そんなんでわかるわけないだろうがよ。

につこりと笑顔で即答された答えに、多分この中では一番マトモ
な風馬はズレた二人の間で頭を抱える。それを二人が面白そうに見
ている。…ある意味、何時もの光景であった。

「まあ、そんなことはどうでもいいとして」

「話を振った奴の言う台詞じゃないぞ」

「……」

しれっとした顔で話し始めた司に、瑠姫は腕を組み言う。その隣で風馬は諦めたように司を見た。

その二人（約一名無言）の抗議を、司はさらりと笑ってながした。

「今回の任務は珍しく」

「珍しく？」

問い返したのは風馬で、瑠姫はもうこの時点ですべてつもなく胡散臭そうな顔をしていた。

二人の反応の違いに対して驚いたふうもなく、司は『そう』と頷く。

「対象が私達のウエに、『護衛をつけてくれ』って頼みに来たらしいのですよ」

「……………、は？」

異口同音、ほうけた顔で聞き返してきた二人に、『貴重な顔ですねえ』と、司は笑った。

『このままでは俺は殺される！！助けてくれなんでもするから！』

対象・『かねよしろうく金良録』四十九歳男が、敵であるはずの政府に泣きついてきたのは、『名物コンビ』がその任務を与えられる、約四時間前のことである。

その慌てぶりは凄かったらしい。

何でも、使用人が一人、また一人と消えていったと思えば、生首が匿名で送られてくるのだそうだ。

「しかも絵に描いたような脅迫状が届く…と。そら、ある意味ホラーだな」

「脅迫状は絵に書けないぞ」

「…………お前に普通の感性を期待した俺が馬鹿だったよ」

額に手をあて、空を仰ぐ彼に、瑠姫は冷やややかに返す。

「ばかばかしいじゃないか、そんなの。元々敵が多いんだから、流せばいいものを、今さら……」

おかげで妙な仕事になってしまった……という、静か過ぎる声音に、風馬は額に冷や汗を浮かべた。

司の阿呆……ッこいつがこういう仕事嫌いなもの知ってるくせに……！

『ごういう仕事』 〃 『対象の護衛』

元々解体することが仕事のような職である。なのにどうして、と彼女は思っているのだろう。

「……まあ、あんま本気でしなくていいぞ。俺等の仕事が減るからな」
「……フツ、それもそうだな……」

『気楽にしとくさ』 といって、ぐっと背を伸ばす瑠姫に、風馬もふつと笑みを見せた。

「じゃ、さつさと行くとするか」
「ああ」

何時も通りの瑠姫の反応に、風馬はほっと息をついた。

そこはまさに、『成金の家』だった。

口をアホみたいにはかつと開け、その邸の門扉をほけらつと眺める風馬の隣で、瑠姫は眉を寄せ、今にもそれを消し去りたいという顔で、邸を睨みつけていた。

彼らが立っているのは、『金良 録』の邸の前。……任務を受けた時にも感じたことだが、なんとも金に意地汚そうな名前である。

……この邸を見るからに、名前の通りの気がしてきた二人である。
ほそつと風馬は言った。

「……………でかつ」

その呟きに、どこか疲れた様子で瑠姫は返した。

「その前に、目が痛いんだが」

「そりゃ認める」

「こくりと、風馬は頷いた。

その邸は、目がくらむほど、キラキラと輝いていた。

いたるところに金箔がはられ、所狭しとばかりに並べられている銀色の像や絵画……言っては悪いとは思うが、邸の主の趣味を疑う。

それは護衛を命じられた『名物コンビ』も例外ではなく。

「この邸……燃やしてやりたい……」

「同感……これなら恨まれてもしかたない気がする」

二人はうんざりした様子で通された部屋を見渡す。

西洋風の凝った机に、白いレースを使ったテーブルクロス、二人の座っている椅子は机とセット。

床には紅に金糸で刺繍をあしらわれた絨毯、頭上には煌々と煌めくシャンデリア。大きな窓は観音開きで、白いレースと紅のカーテン……まさしく西洋。

「ここは日本の筈なんだが……」

常識離れた二人がそう思うのも、致し方ないだろう。

この部屋に通される道も、『日本』とは程遠いもので、面積なんぞ、考えたくも無い。それ程にこの邸は、西洋の造りに似ているのだ。

「……セキュリティシステムは思ってたよりもしっかりしていたな」

「ああ……これ程のカメラを気にしながらの犯行は、相当に神経を使うだろうしな……一体誰が殺ったんだか……」

この邸は塀から約五キロメートルの位置まで、カメラを張り巡らせていた。それはもう、ありえないぐらい。

面倒そうに、二人はため息をついた。

「主が到着しました」

女性の声がそう告げたのは、二人が『金良宅』を訪れ、約十五分ほどたつたところである。

それなりに気の長い二人は出された紅茶とクッキーをいただきながら、言い合いをしていた。…一方的に、ではあるが。

「…来たか」

「すいませんねえ、遅れまして」

ぼそつと呟いた瑠姫にかぶせるように、中年男性っぽい声が出た。振り向いたそこに立っていたのは、背が低く、メタボリックな声から推測したように中年男性。目が小さく、鼻が大きくはげている。美形とは、お世辞でもいえない。

美形に見慣れている二人にとって、彼が本当に人か疑ってしまうほど…いろいろな意味で、ダメだった。

本当ならピシリとしているのであろう灰色のスーツはよれていて、オロオロとする彼の様子は、曲がりなりにも大手有名会社の幹部の一人だとは思えない。

顔に心情を出すほど、二人が馬鹿ではないことが救いだつた。

風馬はビジネス笑顔^{スマイル}で立ち上がり挨拶をした。

「はじめまして、『金良 録』さん。私たちが今回護衛を勤めることになりました、ランスと、彼女が」

「ラスリだ」

二人が『コード』を極端に短くした名を名乗り、風馬は目礼を瑠姫は軽く頭を下げた。

金良は二人が名乗ったことでほっとしたように、にこにここと笑い（別にかわいくもなんともない、化け物のような感じ）、すつと差し出していた風馬の手をぎゅっと握った。

「よろしくお願ひします!!」

……話で聞いたのよりかは、はるかに礼儀正しいな…

笑顔と無表情の下で、二人はそう思った。

最初に消えたのは、金良宅に使用人として入ってきた女性である。まだ二十代前半の、気立ての良い女性だった。

一週間休むことなくきていたのに、ある日を境にぱたりとでてこなくなつたのだ。

『この家の仕事は思ったよりきついかからやめたのかな』：先輩使用人たちはそう思い、報告をするようなことでもないと結論づけた。そして彼女が来なくなつて一週間後、それは送られてきた。

「贈り物？」

最初にそれを受け取つたのは使用人暦の一番長い女性である。

齢七十をすぎた今でも、現役で働いている彼女は、使用人はもちろんのこと、金良からも信頼が厚い。

荷物を手渡された彼女は、郵便配達人の青年を不審そうに見つめた。

「誰からか分かるかい？」

「私は頼まれただけです、そこまでは…」

「そうかい」

今、考えてみると、不自然だったのだ。そのこと自体が。

だが彼女はそれに気づかずうなずき、判子を押して荷物を近くにいた使用人に渡した。

「旦那に届けておくれ。『差出人は不明』ってことも、ちゃんと伝えておくんだよ？」

「はい！」

その使用人は少し重たいその荷物を持って、たたたと階段を駆け上がる。

「けつまずくんじゃないよー！」

「はい！」

ドタッ

「イッター！」

聞こえた音と声に、女性は思わず呟く。

「大丈夫なのかねえ……」

「では失礼しますね」

「ん？ああ、ありがとうね」

帽子を目深にかぶりなおし、軽く頭を下げ彼はくるりと背をむけ……聞こえた悲鳴に、唇の両端を吊り上げた。

配達便の青年を見送ったあと、彼女は持ち場に戻ろうとし……

「キャー　　！」

「な、なにごとだい?!」

背後で上がった悲鳴に彼女は驚きながら老人とは思えぬほどの身のこなしで階段を駆け上がる。

ピチャン……と何かが跳ね……彼女は息を呑んだ。

「何……だい……これは……！」

「あ……あ……あ……っ！」

それを持つて主の元へ行こうとしていた使用人は、しりもちをつき、正気を失っていた。

「……………サヨ……さん……」

その女性の生首は……一週間前に来なくなった使用人のものだった。

「『サヨ』？」

「生首の使用人の名です。『神崎 サヨ』という名でした」

「そうですか」

金良の話をちゃんと聞いていた風馬とは別に、瑠姫は使用人によって机に並べられた数々の脅迫状をじっと見つめていた。

その一枚を無造作に手に取り、顔をすつと近づけ、微かな香りに

きらりと目が光った。

「へえ……」

小さなその咳きが聞こえたのか、長年の勤か、風馬は彼女を振り返った。

「ラスリ？」

瑠姫は視線を一度風馬に向け言った。

「ランス、ライター貸せ」

「？」

不思議に思いながらも、ポイツと風馬はそれを放り投げた。

パシツときれいな弧を描いて手に落ちたライターで、瑠姫は力チ

ツと炎を灯し、脅迫状の一枚を手に取り、あぶりだした。

「……って！何やってんだ?!」

驚きの声に、瑠姫はにやりと笑って見せた。

「分かったぞ、今回の敵」

「な……って、お前それ!!」

ひらりと向けられた脅迫状に、風馬は目を見開いた。

あぶり出し、その紙に浮かんだのは、記号「オメガ」。それは……

「テロリスト集団、オメガだ」

瑠姫はにやりと笑った。

記憶の奥底に封じ込めた闇。

再び、その闇は動き始めたのか……

第三話

殺戮者よ、お前は何を思い人を殺す…？

問われたのは、随分昔：なんと答えたのかも、今は思い出せずに…

蒼い微かな光が揺れた。その揺れにあわせるように、二つの影が、揺れる。

頭を下げる影と、それを見下ろす影。

影を見下ろしていた影が、一步、後ろに下がった。

「…そうか、奴らが動いたか」

「はっ、どうやらそのようで」

暗く、広い空間の中、二つの声が響いた。

「計画に変わりはない…殺れ」

それは、絶対の命令。断わることは出来ぬ、響き。

頭を下げていた影はより深く、頭くちを垂れた。

「仰せのままに」

ひらりと向けられた脅迫状に浮かび上がってきたその記号に、風馬は思わず頬をひきつらせた。

「…って、またあいつらか…！」

「いい加減に懲りたと思っていたんだが、認識が甘かったな」

まさかこんなに早く『コト』を起こすとは。

呆れたようにため息をつき目元を覆うだけの瑠姫に『こいつすげ…』と思いつながら、風馬は目を白黒させている金良を見る。

金良は冷や汗を浮かべ、オロオロと視線をさまよわせていた。

「金良さん…知ってることとやってたこと、洗いざらい吐いていた
だきましよう。でなければ…」

「で、でなければ…？」

「命の保障はできかねます」

もとから命の保障なんざ、してないと思うが…

冷や汗を浮かべる金良に、素晴らしい笑顔で追い討ちをかける風馬を見て、そんなことを瑠姫が思ったのは、また別の話。

「まさか金良があいつらと接触していたとは、驚きだな」

風馬の心からの台詞に、瑠姫も頷きを返す。

「ああ。これであいつが政府に泣きついた理由も分かった…：もう少し沈んでいればよかったものを、あのポケどもめ」

本格的に叩き潰して再起不能にしておいたほうがよかったか…

何も知らない人が聞けば、変な誤解を招きそうな言い回しである。

…：事実には、違いないのだが。

微妙に引きつった顔で風馬は、だがしかし同意した。

「確かに、あの時に完膚なきまでにぶっ潰しとけばよかったんだろ
うが、そうもいかなかっただろう。」

戦争に出たことない奴があ那時は多かったし…：お前のコン
ディションも万全じゃなかった」

あ那時のメンバーが、今のメンバーだったなら、瑠姫のコンディ
ションが万全だったなら、あ那時を潰せていたかもしれない。

だが、現実が違う。

あ那時は負け戦になると覚悟していた。だから、はっきり言っ
て相打ちまで持ち込めたのは本当に運が良かった。

彼女は今でもそう思っている。何時もならば、まったく信じもし
ないものなのに、だ。それは、他のメンバーも同様だ。彼らは、何
らかの形で今までに彼らと相対し、ギリギリでいつも勝利を収めて
きた。…：失ったものが、多すぎたが。

その時はそれほどまでに追い詰められていたのだ。

過去の回想を頭を振ることで強制終了させ、瑠姫はナイフを片手

で遊ぶ。抜き身の刃を、危なげなく。

器用なことは知っているが、何時ザクツといくか分からないそれを見るほうはたまったものではない。

風馬ははらはらしながらも放っておく。一度心配し声をかけ、逆に自分がサクツと逝きかけたからだが。

瑠姫は輝く刃から目を離さずに、口を開いた。

「……………どうしてここを奴らは狙うんだと思う？風馬」

風馬は瑠姫の台詞に眉を寄せた。

「ランスって呼べっての…あー、裏切ったんだろ、間接的に何か言つて。それくらいいしかなさそうだし、あいつ」

小心者っぽいからな。

本音をポロツと零し、風馬は閉め切られたカーテンをシャツとあける。

二人が来たのは午前九時。今はもう夕方六時で、空は血で染め抜いたかのような紅い色をしていた。

少し目に痛い光に手をかざし、ちらりと机の上に並べられた被害者リストを見る。

一人目、神崎サヨ、二人目、春日ナオ、三人目、華音夢、四人目、海斗鈴……十人目まで見て、風馬はぐつと眉間に皺を寄せた。

「……………」

風馬の様子に気づいたのか、瑠姫は眉を寄せて彼を見る。

「……………おい、風馬」

「なんだ？…てか、ここではランスと呼べって…」

風馬のそれをさえぎるように、瑠姫は言った。

「お前まさか、今頃気づいたのか？」

「おう…って、お前気いついてたのかよ?!」

くわつと目を見開く彼に、瑠姫は呆れたとばかりにこれ見よがしにため息をついた。

「普通は一回見たら大方、気づく」

そんなんでは、いつか『キタリス』にかっ飛ばされるぞ。

瑠姫の出した『コード』の人物を思い出し、風馬は静かに冷や汗を流した。

「……………」

「……嫌ならもう少し、渡された資料見とけ」

「…今度から、そうする」

青い顔をして頷く同僚兼相棒に、瑠姫は肩をすくませた。

『キタリス』： 豎琴はテロリスト暗殺部隊の中で一番怒らせると恐ろしいという太鼓判を瑠姫と司に押されている二十五歳の青年でかみおと神音左京の双子の弟である。

兄と違い礼儀正しいが、上官（司ではない）を丸め込む事に関しては警察庁一と噂されている。…本人はそんなの要らないと言いつうだが。

まあ、本当の意味で礼儀正しいのは左京である。豎琴の場合は、どちらかと慇懃無礼だ。仲が良くなるか、同僚なればそれすらもなくなる。

まあようするに、味方なら心強いが、敵には回したくない奴、である。

瑠姫はナイフをクルクルとまわしながら、風馬の開けたカーテンの窓の外を見た。血のような夕焼けは、少しずつ闇に浸食されているようだ。

そんな外を見ながら、瑠姫はぼやいた。

「あいつもバカだったな。…なんて取り入ろうとするなんて…命を捨ててるとしか思えないが」

風馬は一呼吸ほど置き、とりあえずフォローじみたことを口に出した。

「……………正論過ぎて何も言えないけどな、ラスリ…もう少し言い様

があるだろ？」

「ないな」

スパツと言いつつ切った彼女に、『つける薬がない』とばかりに風馬は天井を見上げた。ところどころに、紅い斑点がついている。

「…か。また昔みたくなると思うか…？」

その言葉に、瑠姫は目を伏せた。

紅い花びらが咲く。何人も人間が死んでいる。

忘れることなどできはしない、情景がまぶたの裏に描かれた。

強く目を閉じ、瑠姫は視線を上げる。その瞳の奥で、蒼い炎が揺れた。

「……させないさ。そのために私達がいる……」

そしてふと、瑠姫は風馬に視線を向けた。

「そもそもお前、その時まだ五、六の子供だろう」

私と違って

「…それもそうだな」

ピチャ…と手に落ちてきた紅いモノを舐めとり瑠姫は鼻で笑い、風馬は苦笑した。

テロリスト暗殺部隊直接上官…その男性の前に、呼び出しをくらった司は立っていた。神妙な面持ちで、司は口火を切った。

「…は日本だけでなく、世界各国からも危険視されているテロリスト集団でしたね。十五年前、一時消滅しかけましたが、時を経てまた活動を開始したようです」

司の前に座っている男性は、一度その目を伏せた。

「そうか…また、奴らが…すまないな司。面倒をかける」

「いえ…一番危険かつ面倒なのは私ではありませんよ…」

そう否定した司に、男性は淡く苦笑した。

「それも、そうだな…あの人は何時まで経っても、あの時のまま、追いかけているのだから…」

「……」

上官の眩きに、司は目を伏せた。

『上官』という立場から、『彼女』を見るのは、つらい。
自分だけが安全なのが、苛立たしい。

『ここにいるべきは、私ではないのだ』と、叫んでしまえば…
どれほどに、楽なのだろうか…

そう思うのは、悪いことなのだろうか。

いつも、重荷は『彼女』にだけ、振りかかるのに…

『金良 録』は自殺した。

それが本当の自殺なのかはまだ分かっていない。

ただ、薬を大量に飲んで、首の動脈を掻っ切って…息絶えていた。

『すまない』とだけ、残して。

再び姿を現せた敵に、彼女は立ち向かう。

生きとし生けるもの全てが倒れふし、周りが血の海とかし、屍に
足を取られて…それでもなお。

守るためだけに、刃を振るう…

第四話

呪いが解けるのは、君が……………

優しい笑顔と、残酷すぎる言葉が

胸に癒えない、痕を残して…

「大丈夫なのか、お前」

「え？」

大きな、ぱちりと開かれた目を見て、一瞬同僚が思い浮かんだ。

瑠姫は今、もの凄く不機嫌だった。それはもう、珍しく学校で定着していた無表情を変えて眉間に皺を作るくらいには。

その不機嫌の理由（というより、元凶）は、すぐに分かった。

瑠姫はもう何度目になるか数えるのすら嫌になった言葉を、隣で彼女の正反対の感情を体全体で表現している人物に言った。

「……………おい、いい加減、離れろ」

「え？嫌」

「……………。」

「ふふっ」

ニコニコと楽しそうに笑う少女を、瑠姫は苛立たしげに見やり、髪を乱暴にかきあげた。

それは、一週間前の出来事…

「まったく…懲りるといふことを知らない奴らだな」

ぱんぱんと手を払い、足元でノびている一人の男子生徒を足蹴にする。

放課後の静かな教室で、何時ものごとくに死屍累々なそこに、彼女はただ一人立っていた。

当たり前といえば当たり前前の結果に、瑠姫は流れてきた髪を払い、深いため息をついた。

「学習能力ゼロどもめ…よこすならもつと骨のある奴らを見繕って来い」

軽い運動にすらならなかったじゃないか…

本当に女か疑いたくなるような言葉を吐き捨て、もう一度足元の生徒を蹴り飛ばし、彼女は黄昏色に染まる教室を出る。

部活は何か先生たちの用事があるため、全て休みだ。

そのため、変に静かな学校全体に、規則的な彼女の足音だけが響く。

真つ白な廊下は、陽の光に当たり、紅く染まっている。少しだけ幻想的な、それ。

だが、そんな周りの景色には目もくれず、彼女は紅い絨毯の上をまっすぐに、前だけを見つめて歩いていく。

ふと、彼女は足を止めた。カッン、という涼しげで冷たい音が響き、消え行く。

瑠姫はそんなことなど気にも留めず、ただ眉を潜ませていた。そのまま軽く瞳を閉じ、耳を澄ます。

音の発信源が止まれば、音はしない筈。…なのに。

…音が、した。まるで、何かを殴るような、鈍い音。

瑠姫はそつと瞳を開き、くるりと踵を返した。

風に乗って微かに香った、血の匂いをたどって。

「……南校舎…か？」

小さな呟きは、規則的な足音に消された。

ドムッ

「ドムッ」

パラパラと落ちてきたコンクリートの細かな破片に、その少女は身を竦ませた。

おろされた黒の長髪には、小さなそれがところどころに絡まっている。

「逃げんなよー、サナミちゃん」

「ゴメンネエ？でもあの嬢ちゃんら、瑠姫に傷をつけれないから相当キてるんだよ」

「恨むんなら標的を変えた嬢ちゃんらか、瑠姫に言えよー？」

ケラケラと笑いながら、少女が必死であけた距離を詰めてくる男子達に、『サナミ』は絶望で目をぐつと閉じた。

神様… ついるなら、彼女を……っ

その、刹那。

「ぐえっ」

彼女の願いは、天に通じた。

「何、一人の少女にたむろしている、弱いものいじめしかできない男ども」

絶対零度の声と、視線。

男の啞然とした声が、彼女を見つめる『サナミ』の耳を、右から左に通り返した。

「咲城……瑠姫……?!」

「何だ」

そして、『サナミ』に群がっていた男どもは、俵よろしく山積みになされたのだった（不機嫌最高潮の瑠姫の手によって）。

「…ボケどもめ…私を傷つけられないからといって、何の関係もない奴を巻き込むとは…見下げたものだな…」

人の風上にも置けない。

無様に倒れた男子生徒達に冷たい台詞を吐き捨て、瑠姫はくるりと、座り込んだままの少女を振り返った。

「……大丈夫なのか、お前」
「え？」

キュトンと座り込み、首を傾げる『サナミ』を見つめ、ついと膝を折る。

「大丈夫なのかと聞いている…ケガはないのか？」

さらりと額に掛かる髪を払われ、『サナミ』はハツとして答えた。

「う、うん。大丈夫、だよ……ありがとう」

「…礼を言われるようなことをした覚えはない。ケガがなくて良かったな」

フワッと微笑んだ瑠姫に、『サナミ』は少し頬を染めた。

「…ありがとう…えつと、咲城さん…」

「瑠姫でいい…お前は？」

首をかすかに傾げ、『サナミ』に問うた。

にこつと、『サナミ』は笑った。

「ユキ、鎖波 由記だよ！よろしくね、瑠姫さん！」

「ああ…よろしく、鎖波」

ふつと、瑠姫も微笑んだ。

その翌日からことあるごとにくつついてくる彼女・由記に瑠姫はほとほと困り果て、いつそ天晴れと感心していた。その元気な姿は、本当にあの時の何もできずにいた彼女と同一人物なのかと疑ってしまっただけには。

その様子をどこかで見ていたらしい風馬とと左京は『少しは女の子らしくなるんじゃないか？』と笑っただけだった。

…あのと看ほど同僚を殺したいと思っただけではない。一発ずつ殴るだけで終わらせた自分に賞賛を送りたいほどだ。

諦めたようにため息をつき、瑠姫はクシャリと髪を掴んだ。

「…私と一緒にいて、何がそんなに楽しいんだ？」

不意に口から思わずこぼれたそれに、ハツと瑠姫は手で口元を

押さえ、目を泳がせた。

由記は驚いたように大きな目をさらに大きくして、次ににこっと笑った。

「…瑠姫ってね、他のクラスでは『すごい人』なんだよ？」

「は？」

意味の分からないその言葉に、瑠姫は珍しく素っ頓狂な声を上げた。

『すごいもの見たなあ』と由記は思いつつ、にこにここと笑いながら言葉を続ける。

「入学テスト、定期テスト、抜き打ちテスト全教科オール百点、先生達の評判もいいし、礼儀正しい。運動神経は並以上、男子十人に囲まれても冷静さを失わず返り討ちにするほどの強さ！しかも優しい！憧れるのも、無理ないでしょ？」

「……そんな風に思われていたのか…？ てっきり他のクラスからも嫌われていると思ってた」

かすかに苦笑を見せる彼女に、由記は思いつきり首を振った。

「まさか！瑠姫には嫌われるようなところなんてないよ！」

「…ありがとう」

瑠姫はそう言って、笑った。

作り笑いなんかではない、本当の、心からの笑み。

それは数ヶ月ぶりに見る、笑みだった…

本当に些細な出来事。

その中で生まれた絆。

これは。

切っても切れない…縁…

第五話

さあ、幕を上げようか…

紅と闇が交差する

血に濡れた それを…

「……………は？」

「わあ、どっかで見た光景、ありがと」

「……………」

にっこりと微笑む美女に、二人は思わず顔を見合わせた。

『咲城、風馬。三十分以内に、アレス・リヴァーの元へ』

そんな連絡が入ったのは、ちょうど書類整理に大半のものが終わっていたとき…約十五分ほど前だった。

例に漏れず、書類整理におわれていた二人は書面から目を離し、思わずスピーカーを見つめた。

『繰り返す、咲城、風馬両名……………お呼びだ』

バサバサバサ… ガコンツ

それだけ伝えて切れたアナウンスにかぶるように何か落ちた音がし、二人は顔を引きつらせた。

全ての音が、その部屋から消えた。

左京は思わず作っていたプログラムを全消去してしまい、あの司もくるりとイスを回転させ、固まった表情を隠した。

そして、呼ばれた二人…瑠姫と風馬は遠い目をし、落ちた書類を拾うことすらしようとしなない。

『あの咲城 瑠姫が…!』と驚く者は、残念ながらこの部署にはいない。というか、驚けない。

そこに居た全員が、二人に同情の視線をやった。……ご愁傷様。そんな視線にも気づいていないのか、二人は遠い眼をしたまま、顔を見合わせた。

「……彼女は、鬼か」

「……三十分とか…無理だろ」

まったくもって、その通りだ…

全員が一斉に頷き、司を見た。

視線を感じた彼は、ため息をついた。

「……行って来なさい」

「……ああ」

「………はい」

その時の二人は、まるで死刑宣告を受けた受刑者のような顔だった…らしい。

「……ここからアレスのところまで、何分かかると思ってるんだ…」
「普通に行ったら、間に合わないよなあ。アハハハハ」
もの凄く遠い目をする瑠姫と同じに、風馬も軽く現実逃避に突っ走っていた。

そんな二人に、『アレス・リヴァー』を知る者は、二人とすれ違えば手を合わせた。

アレス・リヴァー。

テロリスト暗殺部隊の中であらゆる意味で別格な彼女は、基本情報収集を得意とする天才プログラマーである。

金髪碧眼の美女。

何も知らない人が見たらそう見えるだろう。

実際、長いお付き合いになりさえしなければそれは正確な情報である。

だがしかし、長いお付き合いになってしまえば、嫌でもその認識を変えなければならぬ。

そう、彼女は『いろいろ』な意味で、別格なのだ…

「少し急ぐか…」

腕時計を見て、風馬はそう呟いた。

平常時のお呼び出しには慣れているが、彼女相手だとどうしても時間を喰ってしまう。

「…仕方ない。瑠姫、『近道』使うぞ」

風馬のその言葉に、瑠姫は思いつきり苦虫を噛み潰した顔をした。

「…通るのか？絶対『変わって』るぞ」

「……………このさい、仕方ないだろ…俺だってあんなところ通りたくない」

ものすごく嫌な顔をして風馬はだが、腕時計の画面を叩く。

「今七時ジャスト。ここから通常ルートを通ったとして掛かる時間は約一時間半、そこからアレスと会うのに三十分、本題に入るまでに約四時間、入ったとしても横道にそれて約三時間無駄ロス。それから帰って二時間半…予測で七時に戻れたらいいほうだ」

「……………」

瑠姫は思わず沈黙した……………有り得る。

無言を肯定ととり、風馬は軽く息をついた。

「しかもここ最近、どこぞの莫迦が仕事しないせいで書類は溜まっ
ていく一方…あの量だとあと四日はかかるだろうけど、こんなこと
してる間にも山は増えていく…考えてる暇ねーぞ」

瑠姫はじーっと風馬を見……………長ーっく息をはきだした。

「……………司や左京に迷惑をかけるのは、いささか……………仕方ない、行く
か」

「その中に俺の名前がないのが気になるけど……………まあいいや」
軽く髪をかきあげ、風馬はにっと笑った。

「では、行くとしますか」

「…ああ」

それに応じた瑠姫は、これから起こるであろうことに、大きくため息をついた。

ブブブツ　ブブブツ　ブブブツ

『侵入者、発見。侵入者、発見』

「あら……誰かしら？」

暗い部屋に、二つの音が響く。

赤いランプが点滅し、その部屋の一角を照らす。

大きなスクリーンに映る男女　　瑠姫と風馬の姿に、声は笑みを含んだ。

「『侵入者』…ね…」

カツン、と軽い音とともに、コーヒーカップをソーサーに戻した。口紅がついたその軽く指でなぞりながら声の主は、楽しそうに言った。

「…さて、三十分以内にたどり着くことができるかしら…？」
楽しそうにその人は、碧に輝く目を細めた。

二人は目の前にある大きな扉を見て、一瞬視線を交差させた。軽く頷き合い、瑠姫は右手で、風馬は左手でその扉に触れ…

バンツ

思いつきり開け放った。

「……………」

「……………」何か内装変わってね？つーか暗っ！」

中は真っ暗闇だった。

延々と続く道には、大きく開け放った二人の立つ場所の明かりは、闇にのまれて最奥にも辿り着いていない。

その道を飾るのは、天使と悪魔の石像だ。しかも、蝋燭らしきものはあるのに、火が灯っていない。

この前に入ったときよりもマシになったかという微妙だが…というか。

「なあ、瑠姫」

「…なんだ」

左手で中を指差し、首を瑠姫の方へ向け、引きつった声で呼びかけた彼に、どこか呆れたような表情を見せながら聞き返した。

その瑠姫に、彼は本当に訳がわからなそうな顔で、言った。

「この前入ったのってさ…確か四日前じゃなかったか…？」

「…そうだな」

「……………中の仕掛けはともかく、内装なんて三日じゃ無理だよな…？」

瑠姫は沈黙し、一言。

「……………アレスだからな」

「……………なるほど」

納得がいき、風馬は嫌々ながら頷いた。

普通というのが当てはまらないからな、あいつは。

そう思いつつ、瑠姫は手にどこからか出したライターを、見える位置にある蝋燭付近にポンッと軽く投げた。

ジュッ

瞬間、火が軽い音を立て線のように駆け抜け、何かが切れる音がした。

しらっとした顔で一步踏み出した瑠姫をぽかんとした顔で風馬は見送りかけ、はっと我にかえった。

「ちょ…っおい瑠姫！」

「……何だ」

瑠姫は風馬に背を向けたまま、投げたライターを拾い上げ、視界の隅に光った垂れ下がるその細い何かに触れた。

「……知っているつもりだが……彼女は怖いな」

それに触れた指先には、血が浮かんでいた。

「……大丈夫か、瑠姫？」

「ん、まあな」

背後に居た風馬にそう返事をし、すっと立ち上がりながらライターを胸ポケットに滑り込ませ、血を軽く舐め取る。

風馬は灯った蠟燭と、それに反射し光るその細い何か　糸を

見て、思わず顔を引きつらせた。

「……なあ。これってもしかしなくても、アレスが開発してた『ジャック・ザ・リッパー』じゃねーか……？」

「名前、結局それになったのか、この『糸』……そうだろうな」

「……ええ……」

風馬は顔をしかめてキラキラと光る途中で切れたらしい糸を目で数えた。

「……あのまま入ってたら、死んでたよな……」

「そうだな」

「……仲間に殺されるなんて、勘弁だぞ俺は」

「それは私も同感だ……行くぞ」

「ああ」

二人はだつと、走り出した。

「あら、バレたのね……さすが瑠姫。風馬は相変わらず微妙ね。助けられてるじゃない、男なのに……まったく」

金髪を払い、目を軽く細めて男らしくない風馬にため息をつく。

微かに吹いた風が、その人の髪を揺らす。

「……じゃあ、『全トラップ』、発動しましょうか……頑張ってるね、瑠

姫と風馬……」

走っていた二人は、微かに何か動く音に、足を止めた。

「……何だ？」

風馬と瑠姫は思わず目を合わせ、唸った。

アレスか……

カチツという、何かか噛み合うような音と同時に……二人は左右にとんだ。

そこに降り注いだのは、火の槍。

「うっそ……」

「殺傷能力高いな、今回はいやに……」

瑠姫は呆れたようにため息をついた。マジで殺しに掛かってるんじゃないのか、アレス。

金髪を揺らし、高らかに笑う美女の姿が目には浮かび、瑠姫は遠い目をしながら飛んできた矢を避けた。

体をひねり、空中で一回転した彼女は、踊るように矢を避ける風馬を呼んだ。

「風馬！あと何分だ？！」

「あと二十分……二十？！」

風馬は自分で言った数字に悲鳴のような声を上げた。

瑠姫はその叫ばれた時間に舌打ちし、アレス・リヴァーがいるであろう奥の、見えない扉に目を凝らす。

キラリと何か光り、瑠姫は叫んだ。

「奥まで一気に走るぞ！」

「ああ！……もーいやだ！何この矢！」

ダツと走り出した風馬は瑠姫の後方を走りながら、目のふちに涙を浮かべた。

「ありえないからありえないから……っあー、何か石の焼けるようなおいがする……アレス、何作っただ今度はー！！！」

ありえない、とホロリと涙を流す風馬に、瑠姫は返した。

「知るかつ！口動かすよりも足動かせ！」

考えたくもない！

そう言い切り、瑠姫はスピードを上げた。

「あ、ひどいわよ二人とも！…まあ今回は殺す気でトラップし掛けてたんだけどね」

本当に仲間かどうか疑いたくなるような台詞を吐き、頼杖をついてため息をついた。

「あーあ…今回も二人の勝ちか…次はどんなのにしようかな…」

「何もするな！」

「あら、早かったわね二人とも」

くるりと振り返った美女の碧眼に、汗を軽く流す風馬と、短いスカートから綺麗な足を惜しげもなくさらし、しかもそれで扉を蹴り開けたらしい怒りというよりもはや諦めに似た光をその目に宿した瑠姫がいた。

四日ぶりにまともに会った二人に彼女　アレス・リヴァーは笑って見せた。

「久しぶりね、二人とも…今回のトラップの感想は？」

「殺す気か」

「…右に同じく」

「ふふふ…！」

二人の答えに、アレスは微笑した。

「で？今日は何だアレス。三十分で来いなんて…正規のルート通ってたらぜったいできない無茶苦茶な注文つけて」

出されたコーヒーを口に含み、乾いた口内と喉を潤して、風馬はそう問うた。

アレスは金髪に触れつつ、伏せていた目を上げ、悪戯に微笑んだ。
「ジツハ…私經由であなた達に仕事が入ってきたの」

「……………」
二人は思い切り沈黙した。瑠姫は紅茶の入ったカップを落としかけ、風馬は冷や汗を流している。

瑠姫はゆつくりとカップを置き、不審そうにアレスを見た。

「……………誰からだ？」

「…聞くなよっ」

聞いたら断れないんだからー！！

頭を抱える風馬に微妙な視線を向け、ものつ淒くいい笑顔のアレスを視界に入れ、諦めのため息をついた。

「ここまで来て聞かないで帰ってみろ…何言われるか、分かったものじゃないぞ」

司に。

ビシツと音を立てて固まった風馬に力なく肩を落として、瑠姫は言った。

「……………あきらめる風馬」

「……………わかった」

嫌そうに頷いた彼を見て、アレスはパンツと手を打った。

「よしっ。風馬の決意も固まったようだし…話すわよー」

楽しそうだな…

二人は同時にそう思い、深いため息をついた。

そのため息に気づいているのかスルーしているのか（絶対に後者だろうが）、アレスは山積みになった書類の束の、中間より少し下あたりにある青い色の付箋がついた束を、すつと抜き取った。

軽く揺れたが倒れない束の山に風馬は十五分ほど前までいた執務室に今頃たまっていろいろ書類の山と、それと必死に戦っているであろう部下と同僚を思い、心の中で涙を流した。

そんな風馬の胸中を一切無視し、アレスは瑠姫の前にその抜き取った束を差し出した。紙の数は、およそ十五枚ほどか。

何のためらいもなくそれを受け取った瑠姫は、アレスを見た。

その視線に混ざる正確な情報を見分け、アレスは流れ落ちてきた髪を払い、口火を切った。

「仕事の依頼人^{クライアント}は、高染^{たかぞめ} 愁蔵、政府のお偉方の一人で、まだ三十前半の男前よ。性格は女たらしだけど、有能な政治家ね」

資料に詳細が書いてあるわ。

そう言われ、瑠姫は手元にある資料に目を落とした。それを横から、ようやく正気を取り戻したらしい風馬が覗き込む。

一枚目の資料には、モノクロの写真と、カラーの写真が貼ってあった。

髪は黒のショートカットで、目は吊り上がり気味ではあるが、細くはない。口元には柔らかな笑みが浮かんである。

まあ確かに美形ではあるが…

「見慣れているから、何とも言えないな」

「そう言うと思ったわ」

アレスは瑠姫の言葉に、軽く苦笑した。

彼女達の属すテロリスト暗殺部隊は、無駄に顔のいい男がたくさんいるのだ。見慣れてしまうのも無理はない。

ペラッと一枚めくったことを確認し、アレスはさらりと爆弾発言をかました。

「仕事っていうのはね、彼が催すパーティーの警備兼護衛なのよ」
「思わず二人は固まった。」

「……は？」

「わあ、どっかで見た光景、ありがとう」

「……………」

にっこりと微笑む美女に、二人は思わず顔を見合わせた。

いつも戦地に向かう彼女に

一時の幸福を…

それが例え 夢幻でも…

第六話

「……………まさに針のムシロだな」

「気分は針鼠とでもいうか？」

二人は突き刺さる視線に、深く重いため息をついた。

二人が同僚、アレス・リヴァーから持ち込まれた仕事内容に、目を点にしていたのは約半日前だ。

今は豪華なシャンデリアがキラキラしく輝くパーティー会場に来ている。

何坪あるのかあまり考えたくない邸内は、清掃が行き届いていて塵一つ落ちていない。

瑠姫は美しい細工が施された手摺に体重を預け、眼下に広がる人の波に、軽く呆れたようなため息をついた。

「いったい何が楽しくて、こんな時季にパーティーなんてするんだか……」

「ははは…そういう型破りなところが、ご婦人方には良いみたいだな。まあ。俺もお前と同じで理解なんかできないけどなー」

ドクターくらいなら、分かるんじゃないか。

正装姿の風馬は瑠姫の方を見ないように、なるべく視線を外に向け、腕を組む。

瑠姫はそんな風馬を怪訝に思いながら、『ドクター』を思い浮かべた。

いつも真っ白な服に身を包み、ベリーショートで両横一房が長い青みがかった黒髪、同じ色の瞳は眼鏡の奥で優しく笑っている。物は腰は落ちて着いた男性のものだが……

「……………そういえば、こここのところこもりっぱなしだな…何してると思う、瑠姫？」

「……………」
瑠姫は眉を寄せて黙した…考え出したらキリがない。
それに風馬が苦笑した。

テロリスト暗殺部隊で、有名な人は三人。

一人目は『伶俐冷徹無表情』・咲城 瑠姫。

二人目は『超絶美女超怖麗女』・アレス・リヴァー。

そして、三人目……『心情不明毒好男』・ドクターこと、架波^{かなみ}里流^{はしろ}である。

一人目に関しては『いつなんどきもおあり』・早乙女 司の方が良いよ
うな気もするが…まあそれは横にのけておいて。

アレスは何故か、里流と仲が良い。

他の部署では『謎』らしいが、その答えは簡単で…

「トラップに、里流が作った物、毎回一つはあるからな…」

今回は、岩をも焼く炎である薬品の匂いが微かに香っていたから
分かったのだが。

今回もまた、そういう新薬開発に力を入れているのだろう……その
被害が仲間にかからなければいいのだが。

「ぶつつけ本番で使われるよりかは、マシか…」

そのポツリと呟かれた言葉に、瑠姫は冷たく返した。

「実験するなら、死刑囚にしてほしいがな」

「……まったくもって、その通り」

何のフォローもできない風馬であった。

「ほい瑠姫……レモネード」

二つのワイングラスの片方を、待っていた瑠姫に渡し、風馬は手
元に残した方のワイングラスの中身を口に含む。

ワイングラスを無言で受け取り壁に背を預けていた瑠姫は、中身
を軽く揺らしながら、目の前を通り、隣に同じように背を預けた風
馬を一度見て、談笑する人々に目を向けた。

着飾った女性達、念には念を、とばかりに化粧をした顔、キツイ香水……

その女性達の熱い視線を独占しているのは、このパーティーの主催者で、アレス・リヴァーに警備権護衛を依頼した、『女たらしの割には結構まともな奴（左京談）』、高染 愁蔵その人である。

風馬は笑顔で女性達の相手をしている愁蔵に、感嘆のため息をついた。

「たく…よくあんな心にもないこと笑顔でサラツと言えるな…さすが女たらし」

計算ずくでやってんだろうな、アレ。

そう言う風馬に、瑠姫は軽く頷いた。

「まあ、外面が良いなら、それを有効に使っべきだろうからな…いいんじゃないか？それが国民にふっかからなければ。政治家なんて皆、腹の中で何考えてるのかサツパリだしな」

「そうだな…お前が言ったら嫌に説得力あるから聞くのはもの凄くやだけど」

「知るか」

スパツと切って捨て、瑠姫はワイングラスに口をつけた。

そんな彼女にもため息をつき、風馬は周りを伺い…またため息をついた。見てる見てる…というか、今日はため息三昧だ。風馬は隣をチラツと見た。

瑠姫は今、注目の的なのだ。男性達からの熱い視線を、この広間に入ってから独占してしまった。

まあ、それも致し方ない。今の瑠姫の姿を見た、いつも彼女を見ているはずの同僚達でさえ、音を立てて固まったのだから……アレスの呼び出し放送と張るほどに。

ま、最初見たときは、俺も驚いたけどさ…

この広間に来る、約六時間前のことを思い出し、風馬は遠い目をした。

「で、聞くけど瑠姫。あなた、ドレスとか持ってた？」

「いや？持ってない。仕事着数着と、学生服と私服のワンピースぐらいか…？まあ、私服はあまり着ないけど…それがどうかしたのか？」

瑠姫はパラパラと見ていた書類を風馬に渡し、突然変なことを聞いてきたアレスに不思議そうな顔をして首をかしげた。

にこおつと笑うアレスにひしひしと嫌な予感を感じる風馬とは逆に、見慣れてしまった瑠姫は軽く眉をひそめただけだった。

アレスはにこやかな笑顔で、瑠姫の短い髪を軽くなでた。

「瑠姫…一応パーティーに行くのよ？護衛って言っても、仕事着私服なんかに行って良いわけじゃないでしょう」

いつもよりはるかに頭の回転が遅い彼女に、風馬はひそかに両手を合わせた。

アレスは何時にも以上に楽しそうで、何時も以上にキラキラしたが、まがまがしい笑顔で、言った。

「あなたに着てもらいたいドレスがいっぱいあるの。今日は『パーティー』なんだから、それくらいいいわよね？」

「は？」

目を思いつきり丸くした彼女の手を両手で握り締め、がたりと立ち上がったアレスにつられ、わけがわからないまま瑠姫も立ち上がる。風馬は我関せずとばかりに渡された書類に目を通していく…がとてもベタなことに、上下逆さまである。

邪魔をしてくる人がいないため、アレスはこれ幸いと瑠姫を引っ張って奥の部屋、プライベートルームへ連れて行く。

「マーメイドドレスがいいかしら？でもそうすると動きにくくなりそうだし…髪もいじらせてもらうからね」

「ちよっ…アレス?!」

何故こんなにも彼女が楽しそうなのか分かった瑠姫は、スーツと顔を蒼くさせその場にとどまろうとする…が、今のアレスに勝てる

はずもなく。

「じゃ、少し席外すからね。風馬も着替えてきなさいよ、トラップは止めておくわ」

「当たり前だ……」

奥の部屋に瑠姫を押し込み、ひよこつと隙間から顔を出してそういった彼女に呆れたように言いながら書類を軽く振って答えた。

それを確認し、ボタンと閉まった扉と、中から聞こえてくる悲鳴と悪魔じみた笑い声を聞き、風馬はもの凄い速さでアレスの執務室を後にしようとする。

瑠姫の無表情が動くのはある意味、彼女がテロリストを『解体』するのよりも恐ろしいことである。これのできたのは風馬が知っているのではアレスを含む問題児三人組みと、昔護衛をした今は有名なシンガーと、由記と司の六人だけだ。

由記と司はともかく、前者三人が絡むとろくなことがない。

風馬は小さく呟いた。

「ごめん瑠姫、忘れないから」

『風馬！あとで覚えてろ！』

「……前言撤回、ヤツパ忘れる」

キレたらしい瑠姫の言葉に、風馬は歩を速めたのだった。

それから、二時間後。

司達のところに一度顔を出し、増えていた書類に目をそむけながら、問われた言葉に冷や汗を流していたのは約一時間前だ。

黒の、どこぞの執事のような正装服を完璧に着こなし、ネクタイを軽く緩めた姿の風馬は、トラップが発動しなかった近道を通り、アレスの執務室に居た。

二時間前とまったく変わっていない執務室と、変に静かなプライベートルームに嫌な予感を覚えつつ、彼は飲みかけだったコーヒ―に口をつけた。当たり前だが冷えている。

軽く息をついて苦いだけのコーヒーをソーサーに戻した、直後。

ガチャ

「はーっ、楽しかったわー！」

「……それは良かったな」

凄く弾んだ声と、『どうでもいい』と言わんばかりな落ち込んだ、百八十度違う二人の声が聞こえ風馬は目を向け　音を立てて固まった。

その場にある一つの影に気づき、アレスはそちらに目を向けた。

「あら、風馬。いたの………ちよっと、風馬ー？」

「おい、風馬？」

風馬は呼びかけられているというのに反応すらできず、じーっと穴があくかと思うほど二人を　否、瑠姫を見つめていた。

瑠姫はその視線に眉をひそめ、アレスは含み笑いをし、つんつんと風馬の胸をつついた。

「ど・う・し・た・のー？風馬。固まっちゃって…そんなに驚いたー？」

「あ、ああ…驚いた」

ようやく動けるようになった風馬は、楽しそうに見上げてくるアレスを見つめ問うた。

「アレス、全部一人でやったのか？」

「もっちろん！にじかんかけてとてもとても美しく、清らかに…でも動きやすさもちゃんと考えてね。瑠姫の肌って綺麗でスベスベしてるから、化粧のりが良くて助かったわ。あ、髪が伸びたのは里君が作ってくれた育毛剤のおかげよ。すごいでしょ、さすが私！」

ついでに『里君』とは、里流のことである。というか。

「結局そこかよ」

今にはじまったことではないが。

思わずアレスにそうツツコミを入れ、まあ確かに綺麗だよなとた

め息をつく。

そのため息をどうとったのか、瑠姫はめったに見ない、恐ろしいほどの満面の笑みを浮かべ、風馬の頬をムニツと掴むと、力任せに引っ張った。

「何だ？何か言いたそうだな、風馬？」

「い、いひゃい！フキ、ヤヒェロ！」

「ふんっ」

涙目になった彼を見て気がおさまったのか、瑠姫は手を離して腕を組み、そっぽを向いた。

まるで、子供だな……

ヒリヒリと痛む頬をなでながら、めったに見せない拗ねた表情に、心の中で苦笑した。

そして、一言。

「……多分、司達が見たら思いっきり固まると思うぞ、その格好」

「……………分かってる」

苦虫を数十匹噛み潰したような顔で、苦々しげに瑠姫はそう言った。

二人の一通りの会話を聞いていたアレスは、にっこりと笑顔で瑠姫の腕を掴んだ。

「じゃ、司君達に見せに行くわよ！」

「……………」

無言の訴えに、風馬は言った。

「諦める、瑠姫。俺じゃ無理」

「……………分かった」

瑠姫の暗い声なんてなんのその。アレスは瑠姫の腕を掴んだまま、執務室を後にし、その二人を追いかけるように風馬も歩き始めた……

……司達に両手を合わせながら。

「瑠姫遅いな、司」

「…そうですね、何かまたあつたんでしょっか」
テロリスト暗殺部隊本部。

書類整理に励んでいた司は同僚・左京の問いに軽く頷き、時計を見た。

咲城 瑠姫、十葉 風馬が『恐怖のお呼び出し』を受けてから早くも三時間がたち、十時半である。

九時ごろに一度だけ風馬が来たが…瑠姫のことを訊ねると思いきり顔を背け冷や汗を流したので聞けなかった。

ポリポリと頭をかき、左京は片目を閉じて司を見た。

「…僕、アレスの執務室行ってこようか？」

心配している左京に、司は苦笑を返した。

「いいえ、この書類の山を先にどうにかしないと…右京が仕事をしてくれたらいいんですが…」

ため息交じりの切実なその言葉に、左京は唸った…確かに。

「いやもうほんとごめんマジで…何と言やいいの？」

「ああ…いいんですよ、別に。右京には無理を言っただけ片してもらってましたから…その内やってくれるでしょう…多分」

「は…ははは…はあ」

疲れのにじむ司の声と翳った表情に、十年以上の付き合いの左京は乾いた笑い声を上げ、小さくため息をついた。

左京 コードキタリスは、左京の双子の弟だ。

ほとんど家にこもりっぱなしだが、仕事は速く、能力もある。なのに、ここ三日間仕事を一つもしなくなつた…大方家にこもりっぱなしで苛つているのだろう。外に出たら良いのと思うが…毎回毎回『面倒』の一言で片付けられるため、左京は打つ手無しである。瑠姫の言うことなら聞きそうだけど…そこまでして仕事させるのもな…瑠姫にも悪いし

自分とよく似た顔を思い出し、左京はもう一度ため息をついた。
その時。

「なーに、この書類の量！崩れたら紙の海ね」

「アレス……笑えないからやめてくれ」

「文句言うなら右京に言ってくれ」

三つの声がそこに響いた。

どこかほっとしたように、左京は入ってきた同僚達を振り返った。

「アレス、久し振り、と風馬お疲れ様。瑠姫……は……」

笑顔を浮かべビシツと固まった左京に、風馬は『あーあ』と言いたげに口を押さえたため息をついた……隠した口元がわずかに歪んでいるのは仕方ない。

「？左京、どうかしたんです……か……？」

急に言葉を止めた左京を不審に思った司も、落としていた視線をあげて固まった。

風馬はその司の反応に堪えきれなくなったのか、背を向けて肩を震わせ、アレスはこのこと邪悪に、瑠姫は思いつきり不機嫌そうに顔を背けた。

先に正気を取り戻したのは司だった。

「瑠姫……なんですかその格好……というか髪、伸びてませんか？」

「……………」

聞くな、とばかりに睨まれ、司は軽く肩をすくめて隣に立っているアレスに視線を向けた。誰がどう見ても『説明しろ』というものである。

向けられた視線に気づき、アレスは固まったままの左京に軽く蹴りをいれ、につこりと笑って見せた。

「綺麗でしょかわいいでしょ？力作なの！」

「はい、まあ綺麗ですしかわいいですが……何がどうなってこんなことになったのかを聞きたいのですが」

切実に。

司は笑ってばかりいる風馬に目を向けつつ、アレスに言う。

「何で瑠姫は化粧をしているのですか？服もチャイナのミニスカー

ト……まさか『呼び出し』の理由がこれだと、ふざけたことは言いませんよね？」

少しだけ険しくなった司の目に怯むことなく、アレスは言う。

「半分正解！で、半分不正解！」

にっこりと笑い、アレスは何処からか一枚の紙を取り出し、司に渡す。

「…これは？」

「書類の要点だけまとめたモノよ。『呼び出し』した理由はコレ」
だから風馬にも正装してもらったの。一回こっちに来たでしょ？
首を傾げたアレスに頷き、司とようやく復活した左京がその書類を見て 同情の視線を瑠姫に向けた。

「……がんばれ、瑠姫」

「つつさい」

忌々しげに彼女は言い捨て、『笑うな』と風馬の背中を蹴り飛ばした。

あの蹴りは地味に痛かったな…

軽いため息をつき、グラスを揺らした。

今隣にいる瑠姫は、していた化粧を紅中心から蒼中心に変え薄くし、腕には白い手袋をしてい瑠。

着ていた蒼の地のチャイナ服や髪型は変わっていない。紅い花のヘアピンと、蒼の左側につけられた大輪の花が増えたが、ピアスは変わっていない。

……完璧にアレスに遊ばれたらしい、これは同情せざるを得ない。

瑠姫は元が良いからな…

風馬はもう一度ため息をついた…本当に、今日はため息三昧だ。

瑠姫はそれに気づき、横目で彼を見て問うた。

「……どうかしたのか、風馬。今日はいやにため息をついてるけど」

「ん？ああ…まったく動きがないなと思ってな」

まさか、『アレスの遊び道具にされていたお前に同情していた』
とは言えず、当たり前障りのない任務のことを言った。

それには瑠姫も『確かに』と頷く。

「ここまで動きがないのは、不自然だな」

「まあ時間はあることだし…気長に待とうか」

軽く肩をすくめてそう言った彼に、瑠姫は軽く頷いた。

「兄貴、これは未確認情報だけあの野郎、政府に警備兼護衛を頼んだらしいっす」

「…ふん、そんなもの、我ら五兄弟の敵ではないわ！」

「おー！」

蝋燭の明かりが揺れる中、そんな幾つものダミ声が響いた。

これから起こる茶番劇に

二人はどんなことを思うだろう…？

第七話

「ということ、二人が先に行っているから、貴方達もなるべく早くに行つて欲しいのですが」

「ええ、良いですよ……君は？」

「別に良いぜ、ここのところ、ずっと部屋に籠りっぱなしだったしな」

瑠姫は今現在、非常に面倒くさい状況に陥っていた。それは…

「お美しいお嬢様、どうか私と一曲」

「いいえ、どうか私の手をお取りください」

「いやいや、この私を」

どうでもいいから散りやがれ

瑠姫は跪く何人も男性の誘いをスパツと切つて捨てた……心の
中で。さすがの瑠姫も、声に出すほど非情ではない……多少顔に出た
かもしれないが。まあそれはそれ、これはこれだ。

今、この場に風馬はいない。先ほど司から連絡が入り外に出たか
らだ。その途端、これである。

疲れて、はーっとため息をつき、それを隠すために口元を手のひ
らで覆った。視線は斜め右下。

ドッキューン！

ハートが打ち抜かれた音がした。だが、瑠姫には聞こえない。

どうしようか、と考える瑠姫の気を引こうと、男性達はあの手こ
の手で話し掛ける……が、まったく気付かない。

それでも諦めずに言い寄る彼等の耳に、一つの男性の音が響いた。
「そんなに言い寄られますと、そちらのお嬢さんがお困りになるだ

けですよ？みなさん」

その声がした方を見て、男性達は微妙な顔をした。

その視線の先には、男性達にしてみれば『胡散臭い』、女性達から見れば『紳士的かつ魅力的』な笑顔を浮かべた

…

「高染さん

クライアント

今回の依頼人がいた。

へえ…これが『高染 愁蔵』、ね…

瑠姫は別段なんとも思わず、現れた彼を見た。

黒に近い燕尾服に、金色のボタン、ピアスは小ぶりな白金に涙型のルビーが下がっている。一級品のようだ。

自然にウエーブした黒髪が額にかかり、キラリと白い歯が光った。

き、きまつてる…!!

全員で胸中で同時にそう思った。

そんな男性達の視線を軽く流し、愁蔵は自分をじつと見つめる瑠姫に少し驚いたような顔をしたあと、フワリと笑った。

「壁の花を気取らずに、踊ったらいかがですか？お嬢さん」

瑠姫はその言葉に微妙な顔をして、何か思いついたのか、口端を軽く上げた。

「では…」

すつと彼女は手を上げて、目を細めた。

「貴方が踊って下さいますか？…私と」

まわりの急激に下がった温度をさらりと無視して、瑠姫は久々に使う言葉に違和感を覚えつつ、めったに使わない表情筋を動かす、とてもとても美しい笑みを浮かべ、首をかしげてみせた。

その『お誘い』に、はじめは驚いていた愁蔵は、ふつと笑うとその手を恭しく取り、軽く頭を下げた。

「喜んで、お相手いたしましょう」

その言葉を愁蔵が発した途端、まるではかったようにオーケストラが演奏をはじめた。曲はカドリール。

愁蔵に手を引かれるまま、広間に踊り出た瑠姫をきっかけに、パ

「ティー会場にいたほぼ全員がパートナーを見つけ、次々と踊り出しました。」

「まったく…」

「どこか疲れたようにたね息をつく瑠姫に気付き、愁蔵は軽く苦笑しました。」

「…さすがに疲れましたか？お嬢さん」

「ああ…まったく、面倒くさい……」

『笑顔』という仮面を外した瑠姫の本音に、足を綺麗に滑らせながら愁蔵は乾いた笑い声をあげ、明言を避けた。

「そんな彼に瑠姫は目を細め、問うた。」

「アレスに、『私達』が来ることを聞いていたのか？」

「ええ。『もの凄くかつこよくて綺麗な男女をつけてあげる』と言われていたので、入っていらしたときにすぐわかりました」

「ああ…そう」

「疲れたようにため息をつく瑠姫に、男性達が目の色を変えて見つけてくる…曲が終わればすぐにでも寄ってくるだろう。」

「どうします？このまま通しでお付き合いしましょうか？」

「……………」

「瑠姫はすばやく視線を走らせた…風馬はまだ戻ってきていない。」

「はあ、とため息をつき、どこか楽しそうな愁蔵に、了承の意を伝えました。」

「は？あの二人が？」

「二人が踊り出す少し前、上司兼同僚、早乙女 司からの突然の連絡が入った風馬は、多少の不安を残しつつ瑠姫を会場に残し、一人で外に出た。」

「そして、通話開始一分ほどでもたらされた爆弾発言に思わず素っ頓狂な声を出したのは致し方ない。」

「その風馬の声を聞いた司は、電話の向こう側でクスクスと笑って」

いる。

風馬はそれにバツが悪そうに頭をかき、声を潜めて言った。

「お前、それ瑠姫が聞いたら起こるぞ……多分」

「多分ですか…私の予測では、怒るより呆れるとおもいますが」

「ああ…うん、そうかも」

その場面を想像して、風馬は苦笑った。

風馬の耳に、かすかな音が届いた。ダンスがはじまったのだろう

……壁の花を気取っていなければいいのだが。

依頼人と踊ってそうだな、と考えつつまだ笑っている司に声を掛けた。

「二人が何時つくかわかるか？」

「わかりませんね…ことが起こる前には着くと思えますが…」

あの二人ですから、時間を特定するのなんて不可能ですよ。

苦笑しているのである司に、風馬はため息をついた。

「やっぱそうか……しゃあねえか、あの二人だしな」

ゴーイングマイウェイ三人組の二人を思い出し、風馬は遠い目を

した。……例え着いていたとしても、あの二人ならことが起こるま

ではどこかに隠れていそうだ、何せ前科がある。

司はなんとなく感じ取ったのか、乾いた笑い声を上げた。

「まあ、いずれひょっこり出てくるでしょう？放っておいても大丈夫

ですよ…というより、放っておきなさい」

司がここまで言うのは珍しい。

瑠姫ならこれが何時ものことだが…司に関しては三人のみだから

問題は無い。

問題ありな気もしつつ、風馬は壁に寄りかかった。

「とりあえず、二人が来るんだな？」

「ええ、瑠姫にもそう伝えておいてくださいね、風馬」

「おう」

じゃあな。

一言返し、風馬はプツツと通信を切った。

薄いそのケータイを手でもてあそびながら、風馬は片目を眇めて、小さく呟いた。

「踊ってなけりゃ、すぐ伝えられる…けどなあ…」
何となく踊っているような気もする…

風馬は小さくため息をつき、来た道を戻った。

「……………うわ、踊ってら…」

しかも、依頼人と。

風馬は戻ってすぐに目に入った光景に啞然としつつ、勘が当たったと額に手を当てた。

戻ってくる途中で曲は二曲目に入った、見つけて逃げてこれればいいが。

風馬は気の無いそぶりでぐるりと広間を見渡した……………これといって、何も起こっていないようだ。

「まあ、平和なのに越したことはないけど……………なんだかな」

はあっとため息をつき、壁にもたれて踊っている二人に目を向けた。…瑠姫の頬が若干引きつっているのは気のせいではないはずだ。

「……………ごめん、瑠姫」

何があっただかが何となく分かり、風馬は小さく謝罪を口にした。

『ごめん瑠姫』

音の波の合間をぬって聞こえた声に、瑠姫は微妙な顔ですつと視線を向けた。

広間の奥にある美しい階段。その階段を数段昇ったところに風馬はいた。

視線が向けられたのが分かったのか、風馬は胸の前で両手を合わせ軽く頭を下げた…謝るくらいならとつと帰ってこいよ。

瑠姫は小さくため息をつき、愁蔵を見た。そろそろ仕事の話をし

なければ。

「で？アレスにどうして今回の依頼を？」

彼女の問いに、愁蔵は軽く頷いた。

「はい。どうやらあるテロリスト集団が私の命を狙っているようで……この前、血濡れの出刃包丁が送りつけられてきたんですよ。牛の血だっただけマシですが、その中に手紙が入っていました。『パーティー当日お命頂戴す』という犯行声明文だったんです。パーティーを取りやめると騒ぎになりますし、かといってこのままにしておくと来られた方々にご迷惑がかかると……それでアレスに相談したら」

『わかったわ！警備と護衛のスペシャリストを二人つけたげる。とつても強いわよ！』

「……と。もの凄く楽しそうにお笑いになって……って、大丈夫ですか？」

「あー……いや、ありそうだな、と……」

瑠姫は思わず遠い目をしながら、心配そうな愁蔵に返した……十中八九、ドレスを着せたくてそんな事を言ったのだろう。

勘弁してくれと、瑠姫は思ったのだった。

「……だそうだ」

「……うん、納得できた。アレスのやりそうなことだよな」

瑠姫から愁蔵の話を聞かされた風馬は、『どうしようもない』と言うように笑う。

ゴーイングマイウェイ三人組が言うことを素直に聞く人なんていやしないだろう……瑠姫が頼めばしてくれそうだが。

ついでに、今二人がいるのはテラスだ。カーテンがなびき、シャンドリアの明かりが少し外にこぼれているが、そこまで明るくは無

い。月明かりの方がまだ明るいだろつ。

瑠姫は白塗りの手摺にもたれて目を閉じ、広間の音を拾う。

まだ、何も起こっていない。

風馬は壁に背を預けて、どこか機嫌の悪そうな瑠姫に苦笑した。

「今回のテロリスト集団、じゃなくて良かったじゃないか、三流で……まあ、一般人がいるから動きは制限されるけど」

考えたよな、そいつら。

風馬の言葉に、瑠姫は渋々頷いた。

「より手際が悪いがな……面倒だ」

「比べるところが違う。まあ、ブラックリスト最下位に近い奴らだしな。俺達が出なくても、良いような気がするけどな」

「アレスに言え」

「無理、俺に死ねと?!」

青い顔で即答した風馬に、瑠姫はため息をついて手をはたはたと振った。

「外は私が見る。中は頼んだ」

「ああ、分かった。あとよろしくな……あ、そうだ」

風馬は広間に戻ろうとしていた足を止め、顔だけ瑠姫の方に向けた。

「司からの連絡だけだな……ドクターと右京がサポートで来るってさ」

「……は?」

「『どうして』とか俺に聞くなよ、知らないから……『何時来るかも分からないから、気に留めておいて欲しい』って言ってたぞ、んじゃな」

微妙に固まった瑠姫をそこに残し、風馬はさっさと広間に戻った。

「……書類片付けろよ……」

こんな所に来る前に。

小さくため息をつき、瑠姫は手の中に現れたトランプの様な四つの縁が鋭いカードを、まるでダイヤのような形になるように、人差し指の上に立たせた。

そこに、代わる代わる現れる人の顔に、小さく呟いた。
「まったく、小物の癖に、私達の手を煩わせるなよ」
五人の顔を映したカードは最後、彼らの名を映した。
『轟五兄弟』と。

二人の切り札ジョーカーは見えない場所に。
二人の心に黒い雲は現れる。

第八話

「なあ、面白そうだから、ここで待つか？」

「…いいですね。事が起これば入りましよう」

轟五兄弟ごごいっせい …名の通り、姓が轟の五人兄弟で、やることは小さいがそれでも立派なテロリスト集団だ。

皇室に悪戯電話をかけたとか、大臣の車のタイヤをパンクさせたとか、国のVIPに石を投げたりとか、不発の手榴弾を政府の天下りに送りつけるだとか、国会議事堂に落書きするだとか…一般人からしてみればただの『事件』だが、国に喧嘩を盛大に吹っかけているので、テロリスト集団である。

一応警察が全力をあげて捜査しているようだが、しっばすらもつかめないらしい。変なところで頭の回る連中だ。その頭をどうして世のため人のために使おうとしないのか。

「この世界に絶望した…か…」

風馬は談笑している高染 愁蔵を眺め、深くため息をついた。確かに今の日本…否、世界は信用足りえず、絶望する方が『あっている』。実を言うと風馬もテロリスト集団の方に一理あると思っている。というか、『テロリスト暗殺部隊』の皆がそうだろう。

まあ、今はそれはどうでもいいとして。

風馬は壁にもたれて呟いた。

「それにしても…暇だ」

風馬は目を伏せ神経を研ぎ澄ませ …カッと目を見開いた。

「…！」

空を見上げていた瑠姫は、急に入った『音』にハッと、テラス

から中に入った。

変わりはない……ように見える。

だが瑠姫は慎重に広間を見渡す。風馬もきつと今頃、同じ事をしているだろう。

瑠姫は目を細め、階下に集中した。同じ場所にいるのは、踊りつかれた貴婦人や紳士くらいだ。

美しい手摺をキュツと握り、瑠姫は緩やかに息を吐いた。

それは冷たい波紋となり、瑠姫を中心としてその場に広がっていく。

「……………？ ……五つ」

瑠姫はこの場になかった五つの存在を感じ取り、眉を寄せた。

十中八九、それは轟五兄弟であろう…そう、彼女が眉を寄せる原因は、そんな小物ではない。

「…あいつら、本当にこつちに来てるのか…？」

瑠姫は呟き、軽く頭を振った。

ここにはこの国の最重要人物もいるのだ、来るには来るだろう…
応……手伝う気があるかどうかはともかく。

腕は確かなのだから、いたらいたで心強いのだが。ただし、二人が本気になってくれさえすればの、話ではあるが。

瑠姫は深くため息をつき、下手をすれば無限ループになりそうな思考を止めた。考えてもしかたない。

五つの気配は何か、もしくは誰かを中心とする丸い円を描く位置に存在していた。まあ、これは考えなくとも中心にいるのが誰なのかは分かる。

瑠姫はすつと依頼人に目を向けて……思わず大きなため息をついた。

「何をしてるんだ……彼は」

愁蔵は女性達に囲まれ、思うように身動きが取れない状態だった。ついでにと風馬の方を見てみると…同じようなものだった。雰囲気からして、気配には気付いているようだが…

「…駄目だな、これは」

瑠姫は小さく呟き、髪に飾られた蒼の造花に触れようとして…

バリーンッ

その手を止めざるを得なくなった。

この建物のいたるところに置かれてあるガラス細工や壺が、木っ端微塵に砕け散ったのだ。

数瞬の沈黙の後、誰かが叫んだ。

「きゃーっ！」

それはまるで飛び火するように会場全体に伝染していった。

騒ぎ出した周りに瑠姫は驚くことはなかった…だが、舌打ちした。

「邪魔くさい……！」

砕け散ったものは全て一階の物、二階のガラス細工や壺は何一つ割れていない。それに気付いた招待客が我先にと押し寄せてきたのだ。これでは仕込みの『武具』が使い物にならない。

理由など言わなくても分かるだろう。一般人には刺激が強すぎるのだ。

珍しく何もできない。いつもならこれほどに後手に回ることはいのだが。

「頭が良いと言う噂は、どうやら本当のようだな…」

皮肉げに瑠姫は笑った。こんな奴らが政治家への道を進めば良いものを…

さて、どうしたものか…

そんなことを考えている瑠姫は、不意に腕をつかまれ眉間に皺を寄せた。

「何…っ？」

人が多すぎてを振り払うことができなかった彼女は人の波にのまれ、テラス側に追いやられてしまった。

ダンッ

「っ…っ」

思いつきり壁に背中からぶつかり、その拍子に蒼の造花が落ちた。
しまった…っ

無表情だった顔を歪ませ、瑠姫はそれを蹴り上げようとしたとき…
造花は誰かに蹴り飛ばされ、つかまれていた腕を引っ張られた。
一般人なら、腕が折れるほどの力。

だが、残念ながら瑠姫は『一般』という常識では測れないほどの人である。

額に青筋を立て、瑠姫は左腕を無遠慮につかんでいる『誰か』の手首に右手でそつと触れ少し離し…力任せに振り下ろした。

力加減はしてある。人を昏倒させるだけの力を入れたが、手刀とそれほど変わらない。

「…っうわあっ…！」

上の方で男の悲鳴が聞こえた…が、別に知った声ではなかったのだ。腕が解放されると同時にスルリと人々の微かな隙間を潜り抜け、階下を見下ろせる場所へと移動し始めた。

瑠姫は足に絡み付いてくるドレスの布に苛つきを覚えた。そして、もう…っ…

「…あの二人、今何処にいるんだ…！」

ああもう動きづらい、ドレスの丈短くしてやるっか！

男性同僚が聞けば顔を青、もしくは赤くして止めようとするだろうことを考えながら、瑠姫は足を動かした。

美しい細工が施された手摺に手が届いた、その瞬間…

「死ねえーっ…！」

銃声音が、響いた。

「ぎゃーっ…！」

風馬はひどく冷静に近くで割れた花瓶を見、瑠姫がいるであろう場所を見る。

一瞬、本当に一瞬だけ瑠姫の姿が見えたが、まるで誰かに引っぱられるように消えた。

押し流されたのか？！

風馬はそのことに少し驚きながら小さく指を動かし瑠姫と同じく仕込み『武具』を取り出そうとし…

「風馬様、怖い！」

一人の女性が抱きついてきた。しかもそれはよりによって『武具』を取り出そうとしていた右腕で…

勘弁してくれ！

思わずそう叫びかけ、『一般人だ、相手は一般人だ』と言い聞かせながら何も言わずにその女性の手をほごうと左手を動かせば…

「助けて風馬様！」

…他大勢がくつついてきた。

これにはさすがの風馬も辟易した。一人ならばともかく三人、四人と来られたらヘタに動けない。

しかも周りには上へ行こうとする集団もいる…もしかしくなくとも全員がそう動いているのかもしれない。女性が引っ付いているのでまったく周りの様子が伺えないので、なんともいえないのだが。

風馬は舌打ちしたい気に駆られながら視線だけ泳がせた。不審な人物は見当たらない。

ホント頭いいなオイ！それをこんなことに使うんじゃないよ！つうかあの二人はまだか？！

瑠姫と同じ事を考えながら、彼は不審者を探していた視線の中で愁蔵を探した。

彼は不審者よりも早く見つかった。

周りにいた女性達はとつと逃げたのだろう、ぽつかりと開いた空間には、彼しかいなかった。

何やってんだ、アイツは……！

依頼人だということも忘れ、風馬は心の中で罵倒した。

愁蔵の周りにはいつの間にか風馬が探していた黒ずくめの、どう鼻屑目に見てもパーティイに来るには場違いな服を着た五人の不審者がいた。

手に銃を持っているのは三人、ナイフを持っているのは二人。

銃を持っている一人、愁蔵の正面に立っている長男だろう男がそれを愁蔵に突きつけ、騒いでいる。

「高染愁蔵…！お前はこんなふざけたパーティイを開いている間に、何人の人が死んでいるのか知ってるか？！」

「こんなことをしている間にも食べ物がなくて苦しんでいる人がいるのに…！」

次々に彼らは不満をぶちまけていく。

彼らの目の前にいる彼こそが、その災いの源だとも言うように、憎むように。

「今の政府は信用ならない！」

「国民の税金が何に使われているのかも分からないなんておかしいとは思わないのか？！」

うつわー、超がつく程まっとうな意見だな

こんな状況下でも風馬はもの凄く冷静だった。

愁蔵もひどく落ち着いた様子で周りを取り囲む彼らを見据えていた。さすが、腐っても政治家。

「そうですね、私がこれを開いている間に沢山の人々が亡くなっているかもしれません。ですが、今この国の内政も苦しいのです。外国のことにまで気をまわしている暇は無いのです。ですが」

「うるさい…！」

彼の言葉を途中でさえぎり、長男は銃をしつかりと彼の額に向けた。

「警察官の汚職事件、政治化の賄賂疑惑、煮え切らない先進国への返答や国民の生活の安全…どれをとっても政府の対策は適当すぎる！いつこの国が戦火にのまれるかわかったもんじゃありません！それじゃ

あ救われる人間も救われやしない！」

「それは…！」

愁蔵は反論しようとし何も言えずに唇を噛んだ……その通りだからだ。それを見て長男はどこか勝ち誇ったように叫んだ。

「これは、政府への見せしめだ！お前は日本を変えるための生贄になるんだ！」

不味い！

男の狂気に揺れた目にさすがに舌打ちし、風馬はまわりに磁石のごとくひつついた女性達をそのままに武具を取り出そうと手を動かした、が、間に合わない。

「死ねえーっ！！」

銃声音が、響いた。

「……やれやれ、勘弁してくださいよ、轟さん？」

銃を撃った体勢のまま彼は固まっていた。彼だけではない。撃たれたはずの愁蔵も周りに居たその他大勢も、女性達にひつつかれている風馬も手摺に身を預けるように下を見ていた瑠姫も、見事に固まっていた。長男の手にある銃からは確かに硝煙があがっている。

こ、この声は…

風馬は閉まっていたはずの大扉をギギギツという音がしそうなほどにゆっくりと見やった。

音もなくいつの間にか開いていたその扉から、一步この広間に入ったところ、そこに居たのは…

「お疲れ様です、右京。命中率がまた一段と高くなりましたね」

「まあ元々素手だからな……動体視力と命中率だけはいいんだよ」

「うっわぁ…マジかよ」

風馬はポツリと呟いた。

そこに居たのは、白のロングコートを羽織り、青味がかつた黒の目に同色のベリーショートで、両横一房ずつが肩まである眼鏡をか

けた優男風の男と、焦げ茶のロングコートに茶色の目と同色の右側一房が顎あたりまである鋭さが際立つ男の二人組みだった。

そして瑠姫と風馬は二人が誰だかを良く知っている。

脱力して瑠姫は手摺につけた手をおろし、深々とため息をついた。

「どこのいたんだ…二人とも…」

小さなその呟きは三人の耳にしっかりと届いたらしい。優男がフツツと笑って答えた。

「門の前でじつとしていたんですよ」

「間に合ったからいいだろ？」

「そういう問題じゃない」

二人は声をそろえてあっけからんと告げた二人につっこんだ。

固まった周りを気にすることなく、風馬はスルリと女性達の絡み付いてくる腕から逃れ、瑠姫は左手を手摺にかけ軽やかに飛び越えて着地して見せた。

膝を立て、すつと立ち上がった瑠姫の耳元でカチャリという音が響き…

「動くな！」

「…はあ」

こめかみに冷たいものが当てられた。

瑠姫が着地したのは良いのか悪いのか、轟兄弟の一人の真ん前だったらしい。

瑠姫は思い切り『面倒くさい』と言いたげな顔で風馬と二人を見た。…見られた方は苦笑するしかないのだが。

「動くところいつを撃つぞ！」

その言葉にジリジリと移動し始めていた愁蔵は苦々しい顔と後悔の滲む顔で固まった。だが三人はしらっとした顔でいつの間にか一箇所に固まるようにして集まっていた彼らを…否、疲れた顔をし捕まっている瑠姫を見た。

「だ、そうですよ。瑠姫」

「……はあ」

笑顔でそう言い放った優男に瑠姫はため息で返した。その二人の会話とも呼べない会話か、目に見えて怯えた様子の無い彼らに切れたのか、瑠姫に銃を突きつけていた男が叫んだ。

「勝手に話すな！」

そんなこと言われても、とばかりに三人は肩を竦めた。こんな状況ははつきり言っていて慣れている。しかも捕まっているのは瑠姫、一般人なら多少は気を使ったりもするだろうが…

だが、彼らのその目は不穏な光に揺れていた。

「そうは言っても、彼女は私達の仲間ですからね」

「お前ら兄弟と同じでな」

それは、『志を同じくするもの』ということ。

「?!」

目に見えて動揺を見せた兄弟に瑠姫は目を鋭くした。

薄い布手袋で覆われた右手で銃をつかみ体を反転させあいた手で銃を持つ手の肘を支えるようにしっかりと持ち…へし折った。

「つつわあああああああ!!」

ガシャンと取り落とした銃は瑠姫の足に華麗に蹴り上げられ、落下地点となった彼女の左手の上に落ちた。

兄弟の叫び声にぎよつとして四人は二人を見た。

跪くように座り込み妙な方向に曲がった腕を抱え込み唇を噛み脂汗を浮かべる兄弟と、それを無表情で見下ろしながら銃で肩を叩いている瑠姫を見て彼らは逆上した。

「お前!!」

飛び掛ってきた四人の声に瑠姫はすつと彼らを見て…少し笑った。

「悪いな……」

「?!」

その小さな言葉が四人の耳に届くよりも前に…二人が地に伏せた。

「な…?!」

長男とその隣に居た男は固まり、足元に崩れ落ちた弟達を見つめた。

そして不意に。

「ああああああ、びくった…」

「仕事増やすなよ、面倒だから」

自分達のすぐ隣にいた風馬と茶髪の男に固まり。

「失礼？」

「?!」

真後ろから聞こえた穏やかな声に思わず振り返り。

「おやすみなさい」

柔らかな笑顔とともに顔に吹き付けられた霧状の『何か』を吸い込んでしまい…

ドサ…

二人とも倒れてしまった。

「兄貴！」

それに一瞬痛みを忘れた男は大きな声をあげ、その被害をもろに被った瑠姫は眉間に皺を寄せた。そして。

「うるさい」

ガイーンッ

予備動作は無かったものの、加減遠慮なく、持っていた銃で男の後頭部を殴った。

「っ…」

うめき声を上げて倒れた男に目を眇めて瑠姫は深くため息をついた。

「うるさいんだよ…騒ぐな」

「氣い失ってる奴に言っても聞こえないだろ」

「気分の問題だ」

呆れた瑠姫の男に対する言葉に言った風馬に、ざっくりと切り返

し持っていた銃を投げ渡した。

器用にそれを受け取った風馬は肩を竦め銃をベルトにかけた。

パチパチという拍手の音がし、二人は『乱入者兼仲間』の二人を見た。手を叩いていたのは優男だけだ、もう一人は足元に転がった男をつついていいる。

優男は拍手をやめ、につこりと二人に笑いかけた。

「見事でしたよ、二人とも」

「そりゃどうも」

軽く返した風馬を一瞥し瑠姫は二人に向き直り腕を組んで首をかしげて眉を寄せ二人に言った。

「もう少し早めにコンタクトを取って欲しいんだが？左京、里流」

それに優男　　里流は悪びれもなくあっさりと答えた。

「すみません、面白いかと想って」

「やめろ」

二人の疲れたような声に二人は声を上げて笑った。

そう、この二人組みこそが今回の助っ人…“ドクター” 架波 里流と神音 右京である。

この二人と、この仕事を瑠姫と風馬に持ってきたアレスは無駄に気が合う。それはもう、恐ろしいほどに。

連行されていく五兄弟を見るとなしに見ながら、瑠姫は腕を組んでジロリと隣に立つ右京と里流を睨んだ。

「どうしてさっさと出てこなかったんだ？」

「はい？」

目をパチクリと開き里流は瑠姫を見て、『ああ』と笑って人差し指を立てた。

そして一言。

「先程も言ったでしょう、面白そうだったからですよ」

「…ああ、言ってたなそういえば…」

ため息をつき、瑠姫は夜空を見上げた。暗い空に月と星が静かに光を灯していた。

「お嬢さん！」

ボーツとその光を見上げていた瑠姫の耳に愁蔵の声が届き、視線をそちらへ投げた。

「クライアント……」

「よかった……まだ帰っていなくて」

少し荒い息を吐きながら愁蔵は瑠姫ににこりと笑った。

瑠姫は首をかしげて組んでいた腕をほどき、愁蔵を見上げた。目は口ほどに物を言うとはこのことだろうか。

愁蔵は笑顔のまま四人に告げた。

「あんなことがあった後ですが……パーティを再開しようと思えますので、お呼びに」

「は？」

瑠姫と風馬は素つ頓狂な声を上げた。この依頼人クライアントは怖いもの知らずなのかただ単に図太いだけなのか……先程までは一応命を狙われていたのだが……

そんな二人を差し置いて里流は笑顔で頷いた。

「いいでしょうね、それは……右京、どうですか？」

「ああ、行く」

里流にふられた右京はもたれていた木の幹から身を離し、少し面白そうに瑠姫に近づいた。

その嫌な笑みに瑠姫は思わず一步後ずさりながら右京を見た。

「な……なんだ」

それに笑みを深くし、右京はついと腰を折り、彼女に恭しく右手を差し出した。

「お美しきお嬢様、私と一曲お相手願えますか？」

見ていた風馬が思いつき引いた。

それを見て取り、瑠姫は少し考えるように差し出された手を見つめ、息を吐き出し。

「はい」

その左手をのせた。

右京にエスコートされていく瑠姫と、その少し後ろを面白そうにゆつくりと追いかける愁蔵を見ながら風馬は大きくため息をついた。本当に、今日は二人そろってよくため息をつく日だ。

そんな様子に気づいたのか、里流は風馬の顔を覗き込んだ。浮かんでいる笑みには少し心配げな色が見て取れた。

「おや、どうしました？風馬」

「ん？…いや」

風馬は少しだけ苦笑じみたものを滲ませ、目を細めた。

「ただ…変わったと思つて、ちよつとな」

「……そうですね」

その誰かがすぐに分かり、里流は優しい目で風馬を見つめた。

「君も、初めて会つたときから言つと…変わりましたよ」

「そうか？そうは思わないけど…」

微妙な顔をして、風馬は里流を見返した。にっこりと、里流は笑つた。

「自分では、自分の変化には疎いものですよ」

「そういうもんか？」

「ええ」

そういうもんです。

里流は頷き、先に行く二人を見つめた。

どうなるか、分からない未来よりも。

はつきりとカタチを持った今を信じる。

あの戦跡、そう誓つたのだから…

「そついや里流、お前長男と多分次男あたりの奴に吹き付けたのつて何だ？」

「え？ああ、開発中の爆・睡眠薬ですよ。効き目が薄くしてもありすぎたので、改良の余地がありますね…」

「……………あ、そ…」

第九話

「……もう一度言ってみろ、司……なんだって？」
「耳が悪くなったのですか？ 瑠姫……休暇ですよ、休暇」
「……ほう……？」

テロリスト暗殺部隊本部にて、ブリザードが起こっていた。

その中心にいるのは白いカッターシャツに薄紫のネクタイを締め、藍色のミニスカートをはいた瑠姫である。

いつもの無表情に増して殺気を孕んだ視線を真っ向から受け、のほほんと笑っていられる司の気が知れない。というより知りたくない。

相棒で慣れているはずの風馬も、何時もは「ふふふ……」と笑って華麗にスルーしてしまう里流だけでなく、今その場に居合わせた全員が瑠姫の殺気に当てられ、見事に固まっていた。

固まっていないのは、この場で一番付き合いが長い司くらいなものである。

その司は吹き荒れるブリザードにも周りの「生ける屍」とかしてしまった同僚すらもさらりと無視し、あまつさえ「無関係」とでもいうように美しく湯のみを傾けていた。風景と素晴らしくあっていない、そこだけが異次元とかしている。

小さな音を立て置かれた湯のみからは、まだ微かに湯気が上がっていた。

そんなことには一切頓着せず、司はさらりとのたまった。

「最近ずっと働きっぱなしだったでしょう？ さすがに上層部も大事な戦力に倒れられては困ると思ったのでしょうか。半強制ですので、文句言わずに受け入れなさい、瑠姫」

絶対ウソだ。

脅したんでしょうね…さすが司。

素晴らしくキラキラと周りに星が飛んでいそうな笑みを浮かべた司を見て、比較的瑠姫の起こすブリザードに慣れている風馬と里流は同時にそんなことを思った。

瑠姫はそんな二人に気付かず腕を組み、じとつと片目で司を見た。

「ほう…司、お前という奴は…相変わらずだな」

「瑠姫も相変わらず仕事の虫ですね。ですから少しの間任務から離れなさい、上司命令です」

ぜつくりと切り捨てられ、そう言われてしまえば瑠姫も引くしかない。

一つ舌打ちをし、比較的書類の山が無い現在彼女に休暇を押し付けている司のデスクに軽く腰掛けた。

「期間はいつまでだ？」

「一週間です」

「……よくもぎとつたな」

瑠姫は予測していたより長い『休暇期間』に呆れたように司を見やる。その視線の先で、司は苦笑をその顔に浮かべながら軽く肩を竦めた。

「瑠姫の働いている時間に比べると、まだ少ないくらいですよ」

「はっ」

司の言葉に鼻で笑い、瑠姫はすっと立ち上がり、本部唯一の出入り口である扉に歩き出した。

「今日からだろう？ 私は帰ることにする…アレスに伝えておけよ、何しでかすか分からないぞ。」

その言葉に一時融解しかけた本部の空気が音を立てて固まった。

振り返りどこか面白そうにそれを見て、瑠姫はふつと笑った。

「じゃあ、一週間後にな…お前達が無事に生きていれば、の話だが」
笑えない。

全員の心が一致した瞬間だった。

「さて、何をするか」

瑠姫は人通りの多い商店街をブラブラと歩いていた。

ウエストバッグを左手に持ち、周囲に気を配りながら散策…そこ
までした後、瑠姫ははつとし、苦虫を噛み潰したような顔で前髪を
軽くかきあげた。

「……仕事病か…？」

無意識とはいえ、『何時ものように』周囲に気を配っていた。

「これは、休みを承諾してよかったかも…」

目を細め、ふつと息を吐き出す。それでもまだ、体の中心と心と
頭の片隅が緊張している。やっていられない。

そんな、自己嫌悪に陥りそうな彼女の耳に。

「あれ…瑠姫？」

「…由記、か？」

瑠姫が振り返ったその先、少女らしい私服姿の鎖波 由記がいた。

「びつくりしたよ…瑠姫に会うとは思ってなかったから」

「だろうな、私も驚いた。よく後姿だけで私だとわかったな」

「あれはカンよ…当たってくれてよかったわ…違ってたら変な人だ
もん」

にこにここと笑う由記に、瑠姫は少し苦く笑った。

二人が今いるのは『ルメイドル』という小さなケーキ屋の隅にあ
る、二人用のテーブルだ。

瑠姫の前にはストレートティーとモンブランが、由記の前にはミ
ルクティーと苺のショートケーキが置かれてある。口をつけた気配
はまだない。

由記は笑ったまま首をかしげて瑠姫に問うた。

「瑠姫がこんな場所知ってるとは思わなかったわ。それよりどうし
てあんなところに立ってたの？ 何時もは家に居るんでしょ？ 人

「ごみは嫌いって言ってたし……」

「ここはだいぶ前からお世話になってる、それに雰囲気が好きなんだ……あそこに立っていたのは、な」

瑠姫は目を少し泳がせ、ひっそりとため息をついた。

「私の知人が、休日ぐらいは外に出ると……放り出されたんだ」

「……そうなの？」

「ああ……」

疲れたような顔をしている瑠姫の前で、由記は少し考え込んだ。

黙った彼女を心配そうに瑠姫は覗き込んだ。

「由記……どうかしたのか？」

「んん……」

由記は覗き込んでくる瑠姫の目をじっと見て、言った。

「じゃあさ、今日は暇だったりする？」

「……今日を含めて一週間は暇だな。それがどうかしたのか？」

軽く首をかしげた瑠姫の言葉に、由記はその瞳を輝かせ……がしつと瑠姫の手を握った。

「それ本当?! 一週間丸々空いてるのねっ?!」

「あ、ああ……空いてる……」

思わぬ喰らいつきようにぎよつとし身を引きながらもこくりと律儀に頷く瑠姫に、由記はキラキラしていた瞳をいつそうキラキラさせ、言った。

「じゃあ一週間私に付き合ってね!」

「あ……ああ……」

「やったあ!」

手放して喜ぶ彼女の姿と、何故か同僚の姿が重なり瑠姫は思わず表情を引きつらせた。

小型版・アレスがいる……まあいいか

アレスよりかは遙かにマシだろう……多分。

そう考えることにして、瑠姫は少し表情を和らげた。

視界の隅で笑いをこらえてるマスターに少々批難がましい目を向

けながら。

それより遡ること一時間前。

瑠姫の捨て台詞にビシツと固まっていた本部は、パンツと急に勢いよく開いた扉にバツと振り返り…

「? どうかしたのか?」

「…右京おー…」

「…なんだよ一体」

怪訝な表情を浮かべた右京が居た。

一気に氷解した本部の雰囲気は首をかしげながらも、まあいいかと自己完結しつつ足を踏み入れた。

自らのデスクに向かいながら、ふっと足を止めてキーボードを一心不乱に打ち始めていた司に軽く世間話のようなノリで右京は言った。

「司、一応『瑠姫の休暇をもぎ取ったから一週間アイツは本部にこない』ってことアレスに伝えてきたけど…瑠姫は承認したんだろうな?」

ガタンツと司、風馬、左京が立ち上がった。

そして全員で。

「よくやった!」

「お……おっ……」

瑠姫の強制休暇は本人が知らなかっただけで、実は本部のメンバーは全員ぐるだったのだ。哀れ瑠姫。

だがまさかそんな反応が返ってくるとは露ほども思っていなかった右京は頬を引きつらせて一歩引きながら頷いた。

何がどうなっただけの反応なのか、まったく理解できていないらしい。

里流は先程の見事なまでに凍り付いた雰囲気と違う浮き足立った本部に苦笑した。アレスは相当恐れられているようだ。まあ、通常

のアレスの言動や行動を振り返れば仕方ない気もするが。

「いささか複雑ですね…」

「何がだ？　というか何だこの空気は…」

「右京……」

少し驚きながら、里流は向かいのデスクに座った友人を見た。

右京は三人に、というよりは本部全員に褒められた理由がいみいち掴み切れていないらしい。しかめっ面で頬杖をついて里流を半眼で見つめてきていた。

その姿に里流は苦笑し、胸を撫で下ろしている三人を見た。

「本当につい先程まで瑠姫がいたんですけどね…最後に爆弾を投下して行っただですよ」

「爆弾…？　『仕事をためていたら消すぞお前ら』的な？」

「それより破壊力は抜群でしたよ…『アレスに私がないことを伝えておかないと、どうなっても知らないぞ』、と」

あと『一週間後に…お前達が生きていたら』とも言っていましたね。

ノホホンと告げられたそれに成る程と右京は頷いた。

「確かに、複雑だな」

「でしょう？　…まあ司まで固まる、という異常事態が見れたことは予想外でしたので、面白いものが見えた、と言ってしまえば、それでおしまいなんですけどね…」

瑠姫が言ったときには、さすがにどうやってアレスを止めればいいのかと考え込んでしまいましたよ。

さらりと言った里流に、右京は盛大に顔を引きつらせた。

「シヤレにならないぞ、それ…言ってきて良かったと思った」

「本部に居る全員がそう思っているでしょうね」

そう言って二人は笑った。

「いつも、放課後はこんなことばかりしているのか？」

荷物を両手に楽しそうに隣を歩く由記に瑠姫は静かに問いかけた。由記は首をかしげながら楽しそうに言った。

「こんなことって…買い物のこと？」

「ああ」

軽く頷き由記を見た。彼女の両手には文具と本と洋服が大量に入った紙袋が握られていた。

その不思議そうな瑠姫のまなざしに、由記は困ったように笑った。「いつもはこんなに大量に買い込んだりなんてしないわ…今日は特別」

「…どうしてだ？」

本気で理解していない彼女に由記はさらりと答えた。

「休日に瑠姫に会えたっただけでもとっても嬉しいのに、その瑠姫と並んで買い物ができるから！」

「……」

そのとても純粹で綺麗な笑顔と言葉に瑠姫は目を大きく見開き…ふっと細めた。とても、とても優しく。

「そう言ってくれると、嬉しいな」

「いーえっ」

ニコニコと笑う由記と、どこか少しいつもと違う雰囲気の瑠姫が、そこにいた。

他愛のない話をしながら歩いている途中で、由記はふと瑠姫に問うた。

「そういえば瑠姫はどこか行きたい場所ってないの？私の買い物にばかりつき合わせてるけど…」

「私か…？」

問われて、瑠姫は由記を見ながら下唇を指で軽く押さえながら考える。

家にあるのは司に押し付けられた今の学校の夏・冬の制服と体操服、グラウンドシューズと革靴。右京からもらったパンプスに手袋。左京から贈られてきた洋服セット三つに帽子一つ。風馬と里流から

もらった腕時計に太ももにつける携帯用暗器入れベルトに、小さなナイフが飛びでるためのプレスレット。昔の依頼人にもらったラジオテープとCD。そしてアレスに押し付けられた化粧品道具モロモロにワンピースを中心としたドレスと服数十着にサンダル三つに靴四足、ブーツ五足。

「……………見事にもらい物しかないな」

覚えている限りの身の回りのものに瑠姫は呟いた。聞き取れなかったのか、由記は首をかした。

「何か言った？」

「いや…ああ、文具が無いんだった」

ようやく思い至ったそれに瑠姫はため息をついた。

「ノートに下敷きにシャーペンにその芯…消しゴムもなかったか」

「そんなに?! どうして一気になくなったの?」

目を丸くする由記に瑠姫は肩をすくめた。

「買わないといけないのは分かっているんだが…毎回忘れてしまうんだ」

その言葉によりいつそう目を開き、由記は意外そうに呟いた。

「……案外抜けてたりするのね、瑠姫って」

「……………よく言われる…」

付き合いの長い連中にはとくに。

苦い顔をしてそう言う瑠姫に由記はクスクスと笑った。笑われる理由が分からずに瑠姫は眉をよせ瑠姫を見る。

「……由記?」

「あ、うんごめん。ただ、瑠姫のことをよく見てて、大切にしているんだなあって思ったの」

にっこりと告げられたそれに、瑠姫の動きがピタリと止まった。

それに気付いて由記は心配そうに瑠姫を見つめた。

「瑠姫?どうかしたの…?」

「……………いや」

困ったように頬をかき、瑠姫は目を泳がせた…まったくもって珍

しい現象である。それを知らない由記はただじつと瑠姫を見つめるだけだが。

その視線に根負けし、瑠姫は躊躇ったのち、口を開いた。

「珍しい、と思って…」

「え？ 何が？」

首をかしげた由記に、瑠姫は少しだけ唇を苦笑の形に歪めた。

「私はあまり正面きつて『大切だ』と言われたことは…そんなにな
いからな」

そういうのは、いまいちよく分からないんだ。

ずり落ちかけた荷物を抱えなおしながら同僚達を思い出す。

あいつらは口では絶対言わないだろうしな…

そこで瑠姫は何も言わない由記に気がつき彼女を見て…ぎよつ
とした。

…それはもう真剣な顔で、由記が瑠姫を見つめていた。真正面か
らそれを見てしまい同学年のそのような顔を見ることが経験上片手
の指で足りるほどしかない瑠姫は、本当に珍しく驚きで固まってい
た。そんな彼女に由記は言った。

「瑠姫…それ、いったいどういうこと…？」

「え、いや…正面きつて言われたことが無いってただだが…由記
？ どうかしたのか？」

フルフルと肩を震わせ顔を下げた由記に瑠姫は心配になり、由記
に心配そうに声をかけた。瞬間。

「瑠姫！！」

「っ?!」

ドサッ

荷物が落ちたことに頓着せず、ガシツと手を握られずいつと顔を
近づけられ…瑠姫はほとんど無意識に顔を引きつらせ身を引いた。

こんなに短時間で瑠姫の表情をクルクル変えられたのはアリスを

相手にするとき以外ではめったに無いことだ。マイペース三人組以外の同僚はこの場面に居合わせた瞬間卒倒するだろう。

そんな瑠姫の反応に気を悪くすることもなく、由記は真剣な目で彼女を見つめた。

「瑠姫、私は瑠姫のこと、とつても大切に思ってるからね！」

その言葉に虚をつかれたように目を開き…ふわりと、ほんの少しだけ、笑った。

「ありがとう、由記……」

それは、心からの感謝の言葉だった。

優しく、鮮やかな彩りに溢れた平和な日常。

仮初の平和を、彼女に…

第十話

守りたい、存在がいる。

それは、全てを捨てても、守りたいと思うモノ……

瑠姫の長い休暇が終わった。

久し振りに足を踏み入れた本部は……

「……何だ、これは」

「ああ、瑠姫……久し振り……」

「久し振り」

足の踏み場が無い程書類が散乱し、その上に折り重なるようにして人が倒れこんでいた。

入ろうとして片足を上げたまま目が点になっている瑠姫に声を掛けた左京は苦笑しながらずっと奥にいる司に視線を投げた。

向けられた方は肩をすくめ、自分の右側にある書類の山に手を伸ばした。その高さはおよそ三十センチ弱……他にもその高さの書類が所狭しと積み上げられている。

まさに書類タワーだ、一体こんなになるまで何があったのか。

瑠姫は足を戻し壁にもたれて問うようなまなざしを動いている二人に投げかける。

投げかけられた二人は無言で見つめ合い、どちらともなく息を吐き出した。口を開いたのは瑠姫の近くのデスクに陣取っていた左京だ。

「実は瑠姫が休暇に入った翌日にけっそうを変えてアレスの部下が一人飛び込んできてね……」

朝、七時半。

テロリスト暗殺部隊本部には十数人の隊員達がいた。その中には政府に『選ばれた』隊員　コードネームを持つ者が全員いた。全員とは言っても、別室にいるアレス、休暇中の瑠姫を除いて、だが。

基本、この部署は朝早く夜遅い。偶に、というよりは連日徹夜というのも珍しくはない。瑠姫や新人、年老いたもの以外は、一年通して徹夜漬けと考えてもいいだろう。

本部は任務量や捌く書類の多さに比べて極端に働き手が少ない。

特殊な任務につけるのはその中でも少人数となり、コード保持者たちはその中から引き抜かれるようにして選ばれるから余計に負担が大きい。

その日もその日で早い者は深夜から、遅い者でも夜が明けきる前から仕事を始めていた。

瑠姫がいないのは多少痛手ではあるが、いつも働きまくっていないから学校にも通っているしかもコード持ちの彼女を休ませるのが今回の方針、簡単に彼女に泣きつくことはできない。それでなくても頼りすぎている一面があるのだ。彼女が出てくるまでには、時間が過ぎることに増えていく書類や任務を一つでも多くこなさなければ。

そんな決意が部署内のコードを持たない職員達の心に宿った。

何せ、彼らは上司とコード保持者達を信頼し敬愛しているのである。

特に、いつもなんだかんだ言いつつ与えられた量以上の仕事を完璧かつ速やかに涼しい顔で遂行する瑠姫に対してはそれもひとしおだ。仕事以外の面に関しても、瑠姫は常に部下達に気を使っているのだ……本人がそう考えているかは別として。

ようするに、瑠姫は本部内で完全に部下の心を掴んでいるのだ、下手をすれば司以上に。顔色を窺わずに言いたいことをズケズケ言うところが好かれているのだろう。

あの無表情とひねくれ微妙に揶じくれた性格、口の悪さを除きさえすれば、瑠姫はよくできた上司なのである。

そういうことで部下の異様なまでに熱いやる気がコード保持者達に伝染したのだ……そしてそれは思いもよらない方向へ転がった。いつもよりハイスペースで仕事が片付いていく中、七時四十五分、予想外の乱入者が音を立てけっそうを変えて本部に飛び込んできたのだ。

「た、大変です隊長！」

「何ですか？」

ここで呼ばれた『隊長』というのは勿論司のことである。

急な乱入者に司はいささか面喰い、他の面々も思わず手を止め足を止めその人を見た。

パーカーにジーンズという警察署内では珍しいラフな格好……アレスの部下である。

司は内心嫌な予感に襲われながらも笑顔で乱入者に向けた。

「一体どうしたのですか？何か……」

「起こったとか、そういう次元を飛び越えてしまいました……っ」

感極まっているのか、少し涙目でその人は司に……いやさ本部内全体に巨大爆弾を投下した。

「アレスさんが……っ、何も言わなくても仕事を始めました……！」

しかも猛スピードで……！

「……それは……」

瑠姫は思わず口を開き、同情の眼差しを倒れこんでいる同僚達に向けた。

アレスは『天才』プログラマーだ。凡人のする百倍のスピードで情報を処理し、かつ的確に分析した後本部に回ってくる。いくら本部内に異様なやる気が充満していたからと言っても相当な重労働だったろう。書類慣れしていない者は、特に。

倒れた同僚達に向けられたものと同じ視線を彼女に贈られた二人は、無言で肩をすくめた。

この現状は言ってしまうえばデスクワークを一般的にできる者と、それに多少毛が生えた程度の者しかいなかったために起こった事態であり、瑠姫が居なくとも司、左京、右京の三人がいればある程度アレスの処理能力に追いつけただろう。

追いつけた、はずなのだが……

「司は三回も上層部に呼び出しをくらってしかもそれが長くてね。」

僕は僕で二日間任務で外に出る羽目になって、右京も入れ違いで今任務に出ててね…里流もそれについて行ってるから…」

「こうなった、と」

「そういうこと」

「瑠姫を呼ぶのも一応提案はしたんですけどあっさり却下になりましてねえ…」

「……」

三人は深々とため息を吐き出した。

瑠姫は書類や折り重なるようにして倒れた同僚達を踏まないように注意しながら部屋に足を踏み入れながらカリカリとこめかみを搔き、二人を見た。

「ご飯食べた？ コーヒー…よりも普通のご飯の方がいいか。作るから食べるだろう？」

「頼みます…大変な量になると思いますが…」

できますか、とどこか心配そうに見てくる司に軽く手を振って応え、倒れたままなのに書類や万年筆を持った仕事の鬼となってしまう同僚達にひきつった表情を浮かべながら奥にある台所に足を向けた。

「手早くできてスタミナのつく料理…何だろう？ 面倒だから野菜炒めでいいか」

ブツブツと呟きながら奥へ入っていく彼女の背を見送り、二人は顔を合わせてほっと息をついた。

手に持ったペンをクルクルと回しながら左京は静かに書類に手を伸ばした司に言った。

「彼女の休暇、もぎ取ってよかったね、司」

「……ええ」

いつも浮かべている笑みを少しだけ穏やかなものに変え、司は楽しそうに笑う。

「今日からまた、『いつもの』職場に戻りますね」

「その前に書類、片付けないとね」

片目を眇めて手に持つそれを軽く振り、茶化すように言う左京に司は笑った。

「言えてますね。ならさっさと片付けますか」

「だね……あ」

「どうしました？左京」

書類を持ち上げたままの体勢でピタリと止まった左京に、司は怪訝そうに首を傾げる。その司に視線を投じながら左京は誰かに頷くように軽く頭を動かした。その様子に納得したように司は一度目を閉じ止まっていた整理を開始した。

それから約一分後、左京の深いため息に司は顔を上げた。彼に

しては珍しく眉間に皺を寄せてこめかみに軽く指を押し当てている。

「右京と里流に何かありました？」

「いや、そんなんじゃないよ……」

司の心配そうな声音に左京はその顔に苦笑いを浮かべ首を横に振り、瑠姫が入っていった台所へ目を向けた。耳を澄ますと高速で何かを切り刻む音がした。ボヤいていた通り野菜炒めを作っているらしい。

よくあんなに早く手を動かせるなど感心しつつ、左京は言った。

「今日瑠姫が出てくるってこと思いついて出勤してるかの確認と……」

「土産は何がいいか聞けつてさ」

「……成程」

呆れたような声で告げた左京に司は思わず苦笑しつつも納得した。忘れていたが右京も里流も心底瑠姫を心配しているグループに入っているのだ。司や左京も人のことは言えないのだが。

やはり彼女は暗殺部になくはならない存在だ。

その当たり前のことを司は感じ、小さく笑った。

「司、左京。味噌汁と豚汁ならどっちがい……何笑ってるんだ」
台所から包丁を片手に顔を出した彼女は唯一まともに動いていたハズの二人が浮かべる表情に目を眇めた。疲れで頭のどこかの回線がぶつ壊れてしまったのだろうか。

その何とも言えない瞳に向かって司は穏やかに否定した。

「とりあえず、今瑠姫が考えているようなことではないと言っておきましょう」

「……そうか」

無理やり納得し、生ぬるい視線を向けてくる左京を見た。

「……で？ 左京はなんだ？」

「ああ……土産は何がいい？」

「…………は？」

長い沈黙の後それだけ言った彼女の当たり前の反応に左京は肩を竦めた。

「僕じゃなくて右京からだよ……今里流と任務に出てるから」

「ああ、そうだったか」

軽く頷き台所を見て。

「……茶っ葉買ってこい」

「…………」

それは土産になるのだろうか。

言うだけ言ってさっさと引つ込んだ瑠姫に何とも言いにくいものを覚え、司と左京は顔を見合わせ、苦笑った。

瑠姫らしい『心配』の仕方だ。

ゆっくり目を閉じた左京を見届け、止まってしまった手を再び動かした。

台所からは、優しさに満ちた香りが漂ってきていた。

苛烈な中にある、確かな優しさに。
ただただ祈っていた 平穩を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4233e/>

瑠璃鬼

2010年12月30日00時55分発行